

絵本『100万回生きたねこ』による国語・英語協同授業

小牛田農林高校 佐々木忠夫

1. はじめに

1-1 現任校について

小牛田農林高等学校は1882年に私立養蚕伝習所として設立された。その後、郡立になり、1910年に宮城県に移管され、宮城県立小牛田農林高等学校と改称した。

1997年4月より、それまでの農業高校から1学年農業技術科2クラス、総合学科3クラスに改編し、男女共学となった。農業技術科の生徒は県内の農業クラブの中心的存在である。総合学科は地区内の進学校の次に人気のある学科になっている。

部活動が盛んであり、伝統的に剣道や柔道は古豪として知られ、県内各地からだけでなく、県外からも進学してくることもある。其れ以外の部活動も基本的には活発である。文芸部は歴史は浅いがさまざまなコンクールで入賞しており、全国高校短歌甲子園（2012）では優勝している。

また、15年ほど前から美里町（本校の所在地）主催で行っているアメリカ・ミネソタ州・ウイノナ市との交流に参加している。毎年5～8人程度の本校生徒を派遣し、ウイノナ市の高校生と交流し、翌年にはウイノナ市の中高生が本校を訪問している。そのため、国際交流に関心が高い生徒が多い。

1-2 生徒の状況

全体的に素直な生徒が多く、中学校時代は成績的に中間層であり、教員に面倒をかける存在ではなかった。一方、クラスや生徒会などで中心的に活動してきた生徒が少なく、自ら進んで何かを行うことはあまり得意ではない。しかし、それぞれの目標の下、もしくは友人たちとの関係の中で学校生活を楽しんでいる生徒が多い。

しかし、学習に対する意欲が欠ける生徒が増えている。学習に対する基礎力、知的力強さ、粘り強さには幾分欠けるところがある。特に数学、英語に苦手意識を持っている生徒が多くなってきている。

日本語の文法的な知識理解が乏しいことから、読解力・表現力をつけるためには主語述語の関係を理解することが必要であると考え、入学時より「国語総合」の授業において現代文・古文・漢文すべてのジャンルで全体もしくは一部の主語述語を確認しながら作品読解を進めてきており、定期考査においても主語述語の理解を問う問題を出題、生徒自身も国語の成績の伸び悩みと主語述語理解が関係していると考えようになってきている。

英語においては中学校時代から苦手意識が強い生徒がほとんどである。会話文などの短い文は何となく意味を取ることができるが、文が長くなると特に複文になると、途端に何を言っているのか分からなくなる生徒が多い。「訳し方が分からない」と生徒はよく言う。当然、日本語を英訳することにも苦手意識がある。並び替えの英作文をさせると、日本語の順番に英語の単語を並びかえることがよくある。それは基本的な日英語の語順の違いを理解できていないからである。

また、音読も苦手としており、基本的な単語を発音することができない場合が多々ある。当然、英語を聴き取る力も弱く、相手に理解できるように英語を話すこともできない。

2. 本実践に至る経緯

この授業は2014年2月に行った授業をやり直したものである。この授業の構想は1年くらい前から温めていたのだが、多忙を理由に実施を先送りしてきた。しかし、東大教授の小森陽一氏に来てい

ただけることになり、急遽行ったのが2014年2月である。それは年度末の実践であったこともあり、1回限りの授業となってしまい、絵本の冒頭部分だけになってしまった。

年度が開けて、我々は1冊全部の授業をしたいとは考えていたが、実施するめどは最初なかった。しかし、校長の助言もあり、何とか実施する方向で検討し、英語科のリーディングの授業の中で行うように調整した。

2-1 英語よりも日本語を

普段、英語の授業をしていると、生徒が和訳をすると変な日本語になっていることがしばしばある。しかし、それを生徒本人は変だとは気づかない。そして、その文の内容をつかめないでいる。単語の意味は分かっても、文全体で、文章全体で何を言っているのかわからないという場面によく出くわす。また、友人の英語教師から「授業中、生徒にフレーズ訳をさせるけど、フレーズ訳はできても、全体の意味がわからないという生徒が多い。」と聞いた。

これは英語以前に日本語がわからないのではないかと思うようになった。それを国語科の教員によく話していた。同じように感じていたそうだ。しかし、それを解決する授業を作れないでいる。ならば、一緒に考えていけないだろうかと思って、このような授業を考えた。言語を教えることを生業としている国語と英語の教師である。日本語と英語の言語として共通する部分で協同できないだろうかと始めたのが本授業である。

2-2 言語の共通性を手がかりに

主語と述語を持っていることは日本語も英語も共通である。日本語はあまりにも無意識に使っているために、日本文を読むときは主語と述語の関係を明確にできず、正確に文の意味を捉えることができない。一方で、英語の授業では「主語+動詞」とよく言われるが、英語は日本語からあまりにかけ離れた文構造のため、主語と述語動詞を捉えられず、文意を正しく捉えることができない。時として、生徒は述語動詞の後に来る「人」を主語と捉えることすらある。

2012年2月。東大教授の小森陽一氏（今回の授業でも指導助言者をお願いしている。）が本校2年農業技術科のクラスで「我が輩は猫である」の授業を行った。その授業は1文、1文の主語と述語を生徒に探させて、それを黒板に記述することが中心の授業だった。しかし、生徒たちの感想には「何を言っているのか、よくわかった」と書いてあった。

この方法を使って、協同の授業を作ることにした。しかし、1年間で完結するためには、分量的に多くなく、英語に翻訳するためにはあまり複雑な構造になっていないこと、できれば、繰り返しの構造があることで、取り組みやすくなるものがよいと考えた。そこで、教材として絵本を使うことにした。（私が英語の絵本を使って授業を作ってきたことも理由のひとつである。）

2-3 英語による英語の授業への反証になるか

また、この授業は現在文科省が推し進めている「英語による英語の授業」が果たして生徒に本当の学力をつけるものなのかの反証になればと願っている。

平成24年度「英語教育実践モデル校」に県教委から指定を受けて、「英語による英語の授業」を1年間行った。それを担当していた他校の教員たちと研究会のようなものを始めた。そこに集まってきた若い先生方が英語だけで授業をしていると、授業がわからずに苦しんでいる生徒たちの姿を見て悩んでいることを知った。

また、東北学院大学の村野井氏は宮城県岩ヶ崎高校での講演で、自らのアメリカの大学での日本語教育の経験から、学習言語による授業が可能であると述べている。しかし、それはクラスサイズが小さく、

できない学生は落として行くという形で行われ、残った学生はごく少数である。その学生たちが日本語でディスカッションができたというのである。

そのような経験を下に、英語による英語の授業が可能だというのであれば、公教育を放棄するものではないか。わからない生徒はわからないままでよい、ごく少数のエリートだけがわかればよいということになる。公教育は大多数が、願わくば、全員がわかること目指すべきである。

3. 絵本「100万回生きたねこ」について

佐野洋子作「100万回生きたねこ」は絵本であるが、一匹のとら猫の生をとおり、愛、死、生について考えさせられる作品である。愛や生と死について考え始める高校生にとって、考えるヒントとなる作品であり、深く読めば読むほど考えさせられる作品である。

主語・述語・それらを説明する言葉すなわち、日本語を分解整理していくことで、文法的な知識の学習だけではなく、作品のより深い理解につなげ、さらに英訳していくことで作品の意識化を深めさせていくことを目的の一つとしてこの作品をテキストとして使うわけだが、この作品にはそのような学習にあっても魅力を失わない力があると考えている。

4. 実施クラスについて

運よく3年総合学科の選択Dのリーディングの授業が2コマで週2回あるため、その1回をこの授業に当て、国語科教員がその時間は授業がないので、その授業に入る形にした。

クラスとしては総合学科19人が選択している。男子5人女子14人という構成である。男子は比較的大人しい生徒であり、女子は活発な女子が数名いて、全体として賑やかなクラスである。また、素直な生徒が多く、教員の発問に関して一生懸命考えようとする。

5. 実際の授業

5-1 実施時期と実施時間

2014年7月1日から12月16日までの火曜日3・4校時に実施した。14回（合計28時間）で完結した。

その後、2015年1月に4時間にわたって、作品の「構造読み」を実施した。

5-2 研究授業

公開研究授業は2014年9月2日と12月16日の2回行った。

助言者・指導者として東京大学大学院教授小森陽一氏に来ていただいた。9月には県内の高校の先生方やみやぎ教育センターの方々、17名と本校教員6名の参加があった。12月には県内の中学校、高教の教員、みやぎ教育センターの方々15名、本校教員6名の参加があった。

5-3 授業準備

授業案は一般的な授業案の形式ではなく、教師と生徒の予想される会話形式で書いた。また、お互いの教員が授業を構成していく中で、考えたことや疑問に思ったことなどをほぼ毎日のように話し合ってきた。我々が3年生の1クラスの正副担任であり、お互いの席が向かい合わせになっている。そのため、思いついたことを思いついたときに話せる環境であったことが幸いしている。そして、この時間がとて

も楽しく、深く考える時間にもなっている。時として1時間以上も話し込んでしまうことさえあった。

実際の授業にはいる前には、ホワイトボードにその日に読む部分を板書しておく。行間を空けておき、書き込みや、あとで英語に翻訳するスペースを取っておく。英訳する関係上、日本文も横書きとした。また、同様のプリントを作成し、授業の始めに配布しておく。

5-4 授業スタイル

本授業のスタイルは教員の問いかけに対して生徒が自由に答えていく形で行った。前半50分を国語教員が担当し、後半50分を英語教員が担当した。

最初は完全分業制で行ったが、途中から教員同士も意見を出したり、疑問を投げかけたりすることもある。これは「国語科&英語科コラボレーション授業」を実践・研究している東京大学大学院博士課程の柁木貴之氏からの助言を参考にしている。そして、この教員同士のやりとりが生徒にとっては新鮮な感覚のようである。これで一層自由な発言ができる雰囲気できたようだ。

5-5 国語の授業

国語の授業はまず、当日扱う部分を教師が表現読みする。次に主語と述語を確認する。その後、その他の文法事項や語句の意味から始まり、それをイメージ化するために教員と生徒が問答しながら進める。文法事項も覚えるためのものでなく、作品の中のイメージがどうなるのかを考えるための手掛かりとした。

具体的には、文毎に主語と述語を生徒とともに探し出す。主語には_____を引き、述語は○で囲むことになっている。さらに、修飾語句は[]で囲むことになっている。これらの記号は元岐阜大学の寺島隆吉氏が考案したTMメソッドの記号である。

生徒が要領を飲み込んでくると、主語と述語はほとんど即座に指摘できるようになった。

さらに、主語と述語がわかってくると、助詞、連体修飾などにも注目することができるようになる。助詞の違いや連体修飾語の存在によって作品の中のイメージがどんどん具体的になってくる。

5-6 英語の授業

英語の授業は、寺島隆吉・寺島美紀子両氏の「センとマルとセンで英語が好きに！に変わる本」(2004年中経出版)を参考にし、次の要領で英訳を行っている。

- (1) 難しい日本文を簡単な日本文にする。(短い日本文に区切る。複文を単文に分ける。)
- (2) 日本文で省略されていることばを付け足す。
- (3) 述語動詞を○で囲み、英語の語順の日本文に並び変える。

基本的に(2)と(3)の作業は国語の授業中で行ってもらっている。したがって、英語の授業中でやらなければならないことは、まず、簡単な日本語にすることである。

たとえば、最初のページに「100万人の 人が、そのねこを かわいがり、100万人の 人が、そのねこが しんだとき なきました。」と重文と複文が入り交じった文がある。これは「100万人の人がそのねこをかわいがった」と「100万人の人がそのねこが死んだ(とき)」と「(100万人の人が) なきました」の3つに分ける。それぞれの文を英訳し、最後に3つの文を接続詞、ここでは when と and を使ってつなぎ合わせる。

さらに、国語の授業でふくらませたイメージに合わせて、語句を選ぶことである。できるだけ、今までに習ってきた語句や簡単な語句を使うことを心がけた。

5-3 生徒が行う

「女の子のねこ」の部分では、教師が中心になって授業をするのではなく、生徒を2~3人のグループに分けて、生徒中心に授業を行った。それぞれのグループが1文ずつ分担して、主語と述語を指摘し、気になった言葉を検討した。その後、英語に直すという授業を行った。

この部分は「王さまのねこ」から始まり、「船のりのねこ」「サーカスの手品つかいのねこ」「どろぼうのねこ」「おばあさんのねこ」と飼い主が変わってきているが、それぞれの話の構造が同じであるため、生徒たちだけでできるだろうと考えた。しかし、教師の指示が不十分であり、生徒たちだけではできなかった。

6. 生徒の感想から見えること

生徒の感想を読んでいると、生徒の授業に対する意識が少しずつ変化していることがわかる。生徒の感想を参考に、生徒にとってこの授業がどんな意味があったのかを見て行きたい。

研究授業参加者の感想に「生徒たちが生き生きと授業に参加して発言しているのが印象に残りました。」とあるように、生徒が楽しく授業を受けていることがわかる。このように積極的に授業に参加することで今までの国語や英語の授業や勉強に対する概念が打ち破られたような気がする。それで学習への意欲が生まれてきたようにも見える。

6-1 英語に対する抵抗感の減少

「ましてや英語にすると聞いたとき、とても私にはできないと思っていました、」(都築遥)のように、この授業をすることを知らせた段階では、絵本を英語に直すことに抵抗感があったようだ。しかし、やっていくうちに「実際やってみると、ひとりではではないですが、一通りできたし、今まで習った単語ばかりでできるんだと知り、復習にもなりました。」と書いている。この生徒はあまり学習全体に積極的ではない生徒である。

では、この抵抗感の減少はどこから来るのだろうか。それは後にも書いているが、

- ① 日本語の分析がきちんとできていることで、文意が明確になっていること
- ② 英語の基本構造をきちんと組み立ててから、修飾語を配置することで英訳する手立てが明確になること
- ③ みんなで行っていることで、協同の力があること

この3つが基本的要因だろう。

6-2 楽しさが感じられる授業

多い意見としては、楽しいという言葉が多くみられた。たとえば、「とても楽しく授業できている。今は毎週のリーディングの授業が楽しみでしかたがない。」(氏家瑞樹)と書いている。この生徒は発言がとても多い生徒で、しかも、全体をまとめたり、新しい視点を出してきたりする。また、わからない単語などは電子辞書ですぐに引いて調べることができる生徒である。さらには「日本語と英語の表現の相違に戸惑いましたが、その中に面白みを感じることができました。」(佐々木萌花)と、日本語と英語のそれぞれの思考の違いに気が付き、それを楽しんでいる意見もあった。この生徒もいろいろな意見を出して授業を引っ張っていく存在である。

この「楽しい」の原因は何から来るのだろうか。

主語と述語に焦点を当てることで、文章の読み解きがしやすく、また、助詞や修飾関係も鮮明になっ

てくるのではないだろうか。

また、この絵本自体読み手の年齢や経験によって、その深さが変わる名作であることにもよる。だから、物語の世界が広がっていく楽しさがあるのではないかと思う。さらに、自分の考えだけでなく、自分の考えとは異なる他の生徒の考えを聞くことで、物語の世界がどんどん広がってゆく楽しさである。そして、それは自分の考えによって、他の生徒も同じように物語の世界を広げていっている様子を見る楽しさでもあるかも知れない。

最後に、英語に直すことによって英語と日本語のものの見方の違いによって物語の世界はさらに広がっていくのではないだろうか。

6-3 楽しいからもっとやりたい

楽しいから、わかるから、もっと勉強したいという気持ちにもなっている。

「今回の授業を通して学んだことを生かして、他の絵本の訳などもやってみたいと思いました。」(高橋朋華)

「まだ、最後まで訳していませんが、今までの授業はとても楽しいので英訳が完成するのがとても楽しみです。」(佐々木萌花)

「この授業は国語も英語も一緒に学べるので続けていってほしいと思いました。違う物語もやってみようと思いました。」(佐々木ゆかり)

6-4 日本語の基礎の上にある英語学習

次に、英語の学習には日本語の豊かな力が必要であると思える感想が随所に見られる。

「日本語をしっかりと理解することで、英文に直すときも楽だと思いました。」(佐々木ゆかり) この生徒は、発言はほとんどしないが、いつも、しっかり授業を聞いている生徒である。

さらにはこの授業を通して新しい表現を自分のものになっている生徒もいる。「かおる先生が文の単語ひとつひとつに込められている意味を解いていき、その意味の状態を保ったまま英語で表現するという作業をすることで表現を豊かにすることができたと思いました。」(今津響也)

「日本語をしっかりと学ぶことは英語を学ぶ上でも大切だと思うので、今後はどちらもつながっていると考え、より一生懸命勉強に取り組みたいです。」(高橋朋華)

「日本語で主語・述語を確認することで、次の英文を作るとき、何がどうなるのか予想をつけやすくなるなということです。…(中略)…英語には日本語と同じように順番がちゃんとあるということを知ることができました。」(阿部華子) この生徒の感想には日本語の力が英語の力の基礎になると言うことだけでなく、言語は違っていても共通する部分があるという発見もある。この生徒は明るく元気で、授業での発言も多く、時には思いついたことがすぐに口に出てしまうが、それが的を射ていることあり、授業の雰囲気をも明るくしている。

この感想を読むと、外国語習得は母語の基礎の上に行われることがわかる。さらに、無意識で使ってきた母語の中に新しい発見をしていることもわかる。これはヴィゴツキーが「思考と言語」の中で「外国語のこのような意識的・意図的習得が、母語の発達のある一定の水準に依拠することは、まったく明らかである。…(中略)…が、また逆に、外国語の習得は、母語の高次の形式のマスターのための道を踏みならす。」(ヴィゴツキー「思考と言語」柴田義松訳 p321 新読書社)と指摘していることに合致するように思われる。

6-5 できるようになる見通しの持てる授業

最後に、この授業を通して、英語や国語の力が伸びる見通しを持ってきている生徒もいます。

「日本語から英文に直すことができるというのは、同時に英文を日本語に和訳することもできるようになるということです。どれが主語でどれが述語なのか、ちゃんと見極める力がついたときに、このことが実現することが可能になると思います。これができるようになれば、より楽しく授業を行うことができ、勉強への意欲も増していくので、とてもためになる授業だと思います。」(阿部華子)

7. まとめ

日本語と英語を同時に学ぶことで、それぞれの力を伸ばすことができる可能性がある。少なくとも、どちらの言語に対しても発見や驚きがあり、生徒たちは楽しみながら授業に取り組み、意欲的に学習していくことができるようになってきた。

7-1 主語と述語に焦点を当てて見えてくるもの

ある国語教員から、「主語と述語だけを注意して読んでいくと、単調になり、深まらない。」というような指摘を受けた。確かにその通りであるかもしれない。本実践でも、主語と述語だけ読み進めているわけではなく、さまざまな助詞にも注目し、連体修飾語、連用修飾語などにも注目しながら、読み進めてきている。それは主語と述語に焦点を当てたからこそ、文意が明確になり、それ以外の助詞や連体修飾語や連用修飾語なども理解できるようになったのではないだろうか。とかく、文法は難しいものと生徒は敬遠しがちであるが、それでも生徒は毎回の授業でこれらの文法事項を手がかりに、物語の世界にどっぷりと浸り深く考えてきた。文法はあくまでも、読んだり、書いたり、話したり、聞いたりする時、できるだけ正確に、イメージ豊かに伝えたり理解したりするための道具である。本授業はそれがわかる授業である。

7-2 日本語・英語の言語として特徴を認識する

日本語と英語の言語としての共通性である「主語と述語動詞があること」をよりどころに、この授業を作り上げてきた。それによって、日英両言語の違いを意識し、それぞれの言語の特徴を認識していけると思われる。

実際、日本語の助詞に相当する言葉は英語にはない。その代わりに英語では、日本語にはある格助詞のうち、主語を表す格助詞「が」や主語を表す係り助詞「は」の働きは英語では語順、すなわち、述語動詞の前に置くことで表すことを生徒は理解してきている。

また、日本語では、連体修飾語（単独の単語で名詞を修飾している）も連体修飾部（2つ以上の単語で1つの修飾語と同じ働きをしている）も名詞の前に来るが、英語では連体修飾語に当たる形容詞などは名詞の前に、連体修飾部にあたる修飾句や修飾節は名詞の後ろに来ると言うこともだいたい理解できるようになってきた。

これらが理解できるということは、分析できると同時に、それを使って、文を新たに構成できると言うことである。このように、両言語の共通点・相違点を理解することで、それぞれの言語を単独で学習するよりも理解しやすくなる。

7-3 英語による英語の授業の反証となるために

次に、今、文部科学省が押し進めている「英語による英語の授業」が本当に生徒たちに英語や言語やコミュニケーションの力をつけることにはならないと思っている。この授業がその反証にできないかと考えている。

日本語できちんと考えるからこそ、英語でも表現できると生徒たちは感じている。

「すぐに英語にしようとする、修飾の関係もよくわからないままで、途中で止まってしまう。しかし、日本語のうちに理解していれば、短い文であれば、自分でも解けそうと思える。」と感想に書いてある。「自分にも英語に直せそうだ」というのである。

前半では「主語」と「述語動詞」を見つけて、それをつないで、英文の骨格である「主語＋動詞＋目的語」の「主語＋動詞」までは基本的にできるようになった。後半は「＋目的語」までをひとまとまりにするようにしてきた。

さらに、複文を英訳していくうえで必要なことは、2つの単文に分けることと、その2つの単文の関係を理解し、適切な接続詞を見つけてつなぐことである。それもできるようになってきている。

このように日本語を英文に直すために日本語を分析する力をつけることで、英語で表現する力が少しずつつくはずである。

しかし、このような過程を経ないで、教科書のようにある場面で使われている表現を使いながら覚えるのでは、EFL の環境にある日本では忘れていくだけである。このような体験は英語教師ならだれでも持っているはずである。

ましてや、作られた場面・生徒の日常からかけ離れた場面でのそのような表現では、自分が言いたいこととの間に大きな隔たる。それでは生徒の要求から出たものではなく、すぐに忘れてしまうのは当然である。

母語である日本語の力を基礎にして英語の力をつけていくことが EFL の環境にある日本語では重要である。

資料 1 授業での英訳

The cat that lived as many as one million times

There was a cat that lived repeatedly for as many as one million years.
The cat died as many as one million times and lived as many as one million times.
It was a great tabby cat.
One million people loved the cat and one million people cried when the cat died.
However, the cat never once cried.

Once, the cat was a king's cat. The cat hated the king.
The king was good at wars and constantly made wars. And he put the cat into a good cage and took it to battle.
One day an arrow flew along and hit the cat. The cat died.
Even during the battle, the king held the cat in his arms and cried.
The king stopped the war and came back to the castle. And he buried the cat in the garden of the castle.

Once, the cat was a sailor's cat. The cat hated the seas.
The sailor took the cat to the seas and port towns around the world.
One day the cat happened to fall from the ship into the sea. The cat could not swim. The sailor helped the cat out of the sea with the net, and he found that the cat was all wet and dead.
The sailor held the cat like a duster in his arms and cried out. And he buried the cat under a tree in a park of a faraway port town.

Once, the cat was a circus magician's cat. The cat hated circuses.
Every day the magician put the cat in the box and cut it completely in two with a saw. Then the magician took the cat out of the box and got a roar of applause.
One day the magician made a mistake and actually cut the cat completely in two.
The magician had the cat cut completely in two down in his hands and cried loudly.
No one applauded. The magician buried the cat in the back of the circus tent.

Once the cat was a thief's cat. The cat hated the thief very much.
The thief, with the cat, walked around the dark town quietly like a cat.
The thief broke into only houses with dogs. While a dog was barking at the cat, the thief broke a safe open.
One day, the cat happened to be bitten to death by a dog.
The thief held the cat in his arms with a stolen diamond and walked crying loudly in the night

town. He came home and buried the cat in the little garden.

Once, the cat was a lonely old lady's cat. The cat hated old ladies very much.

Every day the old lady sat and put the cat on her lap and looked out of the small window.

The cat slept on the old lady's lap all day long.

In time the cat became old and died of old age. The doddering lady held the doddering dead cat in her arms and cried all day long.

The old lady buried the cat beneath a tree in the garden.

Once the cat was a little girl's cat. The cat hated children very much.

The girl carried the cat on her back using a strap and slept with it tightly. When she cried, she wiped her tears on the cat's back.

One day, the cat was on the girl's back and wound around the neck with a strap and happened to die.

The girl held the cat in her arms whose head became unstable and cried all day long.

And she buried the cat under a tree in the garden.

Once, the cat was no one's cat. I say, he was an alley cat.

The cat became himself, his own master for the first time. The cat liked himself very much.

You know, after all he was a great tabby cat, so he became a great alley cat.

Any girl cats wanted to be a bride of the cat.

Some cats presented big fish. Some cats offered good rats. Some cats gifted rare matatabi or silver vine fruits. Some cats licked his tiger-like strips.

The cat said,

"I have lived and died as many as one million times. Now, What a laugh!"

The cat liked himself more than anyone else.

He found a white beautiful cat sitting there. Only she was not interested in the alley cat.

The cat went to the side of the white cat and he said, "I have died as many as a million times."

The white cat just said, "So?"

The cat got a little angry. After all he loved himself.

Day after day the cat went up to the white cat and said.

"Probably you have not even finished living once."

The white cat just said, "So?"

One day, the cat spun quickly over three times in the air in front of the white cat, and said, "I used to be a cat of the circus."

The white cat just said, "So.?!"

Starting to say, "As many as one million times I ..."

"May I stay with you?" the alley cat asked the white cat.

"Yes," the white cat said.

The cat lived with the white cat for the rest of his life.

The white cat gave birth to many cute kittens.

The cat never again said, "As many as one million times..."

The cat loved the white cat and all the kittens even more than he loved himself.

In time, the kittens had grown up and each had gone somewhere.

"They have grown up to be good alley cats." said the cat with satisfaction.

"Yes," replied the white cat. And she purred gently to him.

The white cat got a little older. The cat purred to her even more gently than she did.

"I want to live with the white cat forever," the cat thought.

One day, the cat felt the white cat quiet beside him, and the white cat stopped moving.

For the first time, the cat cried. Night came, morning came, and again night came, morning came, and the cat cried as many as one million times.

Morning came and night came, and one day around noon the cat stopped crying.

Beside the dead white cat, the cat became quiet and didn't move.

The cat never lived again.

資料 2 板書

なにしら。りっぱな とらねこだったので、りっぱな のらねこになりました。
 After all as he was a great tabby cat, he became a great any cat because since as

どんな めずねこも、ねこの およめさんに なりたがりました。
 Any girl cat wanted to be the cat's bride

〈大きなかなをプレゼントする〉ねこ いました。
 Some cats presented him big fish.

〈上等のねずみをさしたず〉ねこ いました。
 Some cats gave him good rats

〈めずらしいまたたびを おみやげにする〉ねこ いました。
 Some cats gifted him rare/silver vine Fruits.

Some matatabi or any female mouse rat

重音、連用修飾、体言、名詞、用言、動詞、形容詞、形容動詞

〈り、はな〉とらもやうを なめくぬる ねこも いました。
 Some cats licked his tiger-like strips. tiger-like ~ オラビ

ねこは いました。
 The cat said

「おれは 100万回も さんだんせ」 as many as one million times
 I have lived and died 断定的強調、男性的、荒っぽい、親しい間柄にしか使われない。

いまさら おつかけて!! 笑止千回 不相手してしまふなんかないせ。 不う、てき 笑止千万

感嘆文 What a laugh!

ねこは、たれよりも 自分が 好きだったのです。解説

白いねこは、「そう。」と いったさりでした。
 The white cat just said, "So?!"

ある日、ねこは [白いねこの まえで] [くちくち] [3回] ちやうかえりをし、 いました。
 One day, the cat spun easily three times in front of the white cat and said

「おれ、〈サーカスの〉ねこだったことも (あんなだせ)。
 I used to be a cat of the circus.

白いねこは、「そう。」と いったさりでした。
 The white cat just said, "So?!"

「おれは、100万回も……」と いいかて、ねこは、
 Starting to say, As many as/million I…… The cat asked the white cat

「そばに (い)て (い)かえ。」と、白いねこに たずねました。
 きまほ 近くか "May I stay with you?"

白いねこは、「ええ。」と いました。
 The white cat said, Yes.

ねこは、[白いねこの そばに] [いつまでも] いました。
 The cat stayed with the white cat forever for the rest of his life

不定詞、動詞、名詞、新名詞、注、送り、おまじ

資料 3 指導案

指導案 ⑤

	学習内容	S：生徒 T：教師
1.	<p>○ 国語</p> <p>(1) 主語・述語・修飾語の確認</p> <p>(2) 主語・述語の確認 嫌い和大嫌いの考察 「王さま」「うみ」「サーカス」と「どろぼう」の違いについて考えながら物語のイメージをふくらませる</p> <p>(3) 主語・述語・修飾語の確認 「歩きまわる」「くらい」「ねこといっしょに」「ねこのように」「ねこのようにしずかに」の形</p>	<p>まず、今日やる部分を読みましようね。それから一文ずつ読んでいきましょう。</p> <p>「あるとき、ねこは どろぼうの ねこでした。」</p> <p>T：ではまず、主語と述語を確認しましょう。 S：主語は「ねこは」述語は「ねこでした」 T：そうですね。日本語は名詞も述語を作ります。今回このねこはだれのねこかというと？ S：「どろぼうのねこ」 T：そうです。今度はどろぼうの所有物になっています。</p> <p>「ねこは、どろぼうなんか だいきらいでした。」</p> <p>T：主語と述語の確認をしましょう。 S：主語は「ねこは」述語は「だいきらいでした」 T：なにがだいきらいなんですか。 S：「どろぼう」 T：さて、今までは「なんか」という助詞がくっついているので、そこから、ねこは悪口を言いたくなるくらい嫌い、「大嫌い」なんだと読んでいました。なにが大嫌いでしたっけ。 S：「王さま」「海」「サーカス」 T：そうでしたね。「どろぼうなんか だいきらいでした」いったいどのくらい嫌いなんでしょう。 S：めちゃくちゃきらい。どうしようもなく嫌い。・・・・・・・・。 T：なぜでしょうね。「王さま」「海」「サーカス」となにがちがうのでしょうか。 S：今度は悪いことの手引きをさせられている。ねこは犬が苦手なのに、わざわざ吠えられなくちゃならない。「王さま」には連れて行かれただけ。「海」は・・・・・・・・。「サーカス」はみんなに喜ばれている。・・・・・・・・。 T：そうですね。もう少し考えていってみましよう。</p> <p>「どろぼうは、ねこと いっしょに、くらい町を ねこのように しずかに歩きまわりました。」</p> <p>T：さあ、主語と述語の確認です。 S：主語は「どろぼうは」述語は「歩きまわりました」 T：「歩きました」ではなく、「歩きまわりました」です。何が違いますか。みなさんはどのようなとき「歩きまわりますか」。たとえば、「学校中を歩きまわる」といいますね。 S：「歩きまわる」だと「歩く」より、何かをさがしながら歩いている感じが</p>

<p>象読み</p>	<p>する。</p> <p>T : 何をさがしているのでしょうかね。</p> <p>S : どろぼうできそうな家。</p> <p>T : そうですね。ではどこを歩きまわったのでしょうか。</p> <p>S : 「くらい町」</p> <p>T : なぜ「くらい」のでしょうか。</p> <p>S : みんな寝ていて電気が消えているから。</p> <p>T : どんな様子で歩きまわっているのでしょうか。</p> <p>S : 「ねこといっしょに」「ねこのようにしずかに」</p> <p>T : では、どろぼうになったつもりで頭の中でその動作をやってみましょう。</p> <p>T : 「ねこといっしょに」ですが、どんなふうと一緒に歩きましたか。</p> <p>S : 肩に乗せて。</p> <p>T : ねこは肩に乗っかっているとずっと一緒にいるのでしょうか。ねこ飼ったことのある人、どうですか。</p> <p>S : それは難しい。</p> <p>T : では、どうしてずっと一晩中どろぼうと離れずにいたのでしょうか。</p> <p>S : つないでいた。・・・・・・・・。</p> <p>T : 考えていきましょうね。さて、「ねこ」が2回出てきますが、最初の「ねこ」は？</p> <p>S : 「100万回生きたねこ」</p> <p>T : 「ねこのように」の「ねこ」は？</p> <p>S : 「一般的なねこ」</p> <p>T : そうですね。2回目の「ねこ」は比喻として使われています。そんなに静かに歩くのですか。</p> <p>もう一度頭の中でどろぼうになってみて下さい。</p> <p>ところで、どろぼうはどうしてねこを連れているのですか。</p> <p>S : どろぼうしやすいように利用している。</p> <p>T : そうですね。次の文にありますね。</p>
<p>(4)</p> <p>主語・述語・修飾語の確認</p> <p>限定の副助詞「だけ」の形象読み</p>	<p>「どろぼうは、いぬのいる 家にだけ どろぼうに はいりました。」</p> <p>T : 主語述語の確認をします。</p> <p>S : 主語は「どろぼうは」述語は「はいりました」</p> <p>T : どこに何しに入ったのですか。</p> <p>S : 「いぬのいる家にだけ」「どろぼうに」</p> <p>T : 「だけ」ということはどういうことですか。</p> <p>S : 限定している。</p> <p>T : 「いぬのいる家にはいました」とどう違いますか。</p> <p>S : 「だけ」がないと、別の時には犬のいない家に入ることもあることになる。</p> <p>T : だれがそのような限定するという判断をしているのでしょうか。</p> <p>S : 「どろぼう」</p> <p>T : どうしてどろぼうは「いぬのいる家にだけ」はいるのですか。</p> <p>S : いぬがねこに吠えている間にしごとをするため。</p>

	<p>(5) 主語・述語・修飾部の確認 「こじあける」の形象読み</p>	<p>T：いぬはねこに対して必ず吠えますか。 S：絶対。気づけば吠える。 T：気づかなかっただけでしょう。 S：吠えない。 T：ということは、どろぼうはねこをいぬのどこにおいたのでしょうか。 S：目の前。すぐ近く。 T：ねこは逃げ出さないのでしょうか。 S：つながれてんじゃないのかな。いや、すくんで動けないんだよ。……。 T：「ねこといっしょに」の部分はどう読めますか。 S：つながれている。 T：とも読むことができそうです。</p> <p>「いぬが ねこに ほえている あいだに、どろぼうは 金庫を こじあけました。」</p> <p>T：主語と述語を確認します。 S：主語は「いぬが」述語は「ほえている」主語は「どろぼうは」述語は「こじあけました」 T：2組ありますね。さて、「いぬがねこにほえている」はどの言葉にかかっていますか。 S：「あいだに」 T：そうですね。「あいだ」というのは時間的に限られた範囲を示す名詞です。「いぬがねこにほえているあいだに」は、この文の修飾部になります。すると、この文の主語と述語は？ S：「どろぼうは」「こじあけました」 T：そうなりますね。では、修飾部を読みたいと思います。「いぬが ねこにほえている あいだに」の部分の主語を「ねこが」で作り直してみましよう。ねこを主体にした文にかえてみて下さい。 S：「ねこが いぬに ほえられている あいだに」 T：受け身の文になりますね。ねこの立場がはっきりします。このどろぼう、どんな人でしょうね。 S：ねこがいやなことを無理矢理させて自分は得している。ずるい。自己中心的。思いやりがない。ずるがしこい。……。 T：ねこを主語にすることでいろいろ見えてきます。ところで、「こじあける」はどのような開け方ですか。 S：無理やり開ける。 T：何をこじあけるのですか。 S：「金庫を」 T：「こじあける」とは、閉じてある物をすきまに物をさしこんだりして無理に開けるという意味ですね。どろぼうのどのような姿が見えますか。 S：必死になって金庫と格闘している姿。 T：何のためにですか。 S：金目の物を取るため。</p>
--	----------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>(6) 主語・述語の確認 補助動詞「しまう」の読み</p>	<p>T: そうですね。</p> <p>「ある日、ねこは いぬに かみころされてしまいました。」</p> <p>T: 主語と述語を確認しましょう。</p> <p>S: 主語は「ねこは」述語は「かみころされてしまいました」</p> <p>T: さあ、このできごとをどろぼうはどう受け止めたでしょうか。</p> <p>S: 予想外の出来事にびっくりしている。取り返しがつかないことが起きたと思っている。</p> <p>T: どこからそう読み取れるのですか。</p> <p>S: 「しまいました」</p> <p>T: そのの？</p> <p>S: 「しまい」</p> <p>T: そうですね。補助動詞「しまう」の持つ意味からそのように読み取ることができるのですね。「しまう」は「終わりになる」「終わりにする」という意味の動詞でしたが、補助動詞になると、予想外のことにびっくりするという意味が生まれます。普通良くない意味で使われます。</p>
<p>(7) 主語・述語・修飾部の確認 形象読み</p>	<p>「どろぼうは、ぬすんだ ダイヤモンドと いっしょに ねこをだいて、夜の町を 大きな声で なきながら、歩きました。」</p> <p>T: 主語と述語を確認しましょう。</p> <p>S: 主語は「どろぼうは」述語は「だいて」「なきながら」「歩きました」</p> <p>T: たしかに、どろぼうの行動を表す動詞は3つあります。ちょっとこの文を無理のないように二つにしてみまじょうか。</p> <p>S: 「どろぼうは、ぬすんだ ダイヤモンドと いっしょに ねこを だいて」「夜の町を 大きな声で なきながら、歩きました。」</p> <p>T: そうですね。二つの文にするとどうなりますか。</p> <p>S: 「どろぼうは ぬすんだ ダイヤモンドと いっしょに ねこを だきました。」「そして、夜の町を 大きな声で なきながら 歩きました。」</p> <p>T: そうですね。無理がありません。「なきながら」はどの言葉にかかっていますか。</p> <p>S: 「歩きました」</p> <p>T: 「夜の町を 大きな声で なきながら」は「歩きました」にかかる修飾部ですね。すると、この文の主語と述語はどうなりますか。</p> <p>S: 「どろぼうは」「だいて」「歩きました」</p> <p>T: 「ぬすんだダイヤモンドといっしょに」はどの言葉にかかりますか。</p> <p>S: 「だきました」</p> <p>T: なにをですか。</p> <p>S 「ねこを」</p> <p>T: ちょっと、自分がそうしているつもりになって頭の中でイメージしてみてください。</p> <p>T: ダイヤモンドはどんな風に持ちましたか。何個でしょう。</p> <p>T: なぜ泣いているのでしょうか。</p>

	<p>(8) 主語・述語の確認 「小さなにわ」 の形象読み</p>	<p>S: ねこの死を悲しんでいる。どろぼうしにくくなって悲しんでいる。 T: どっちでしょうね。 S: どっちも。ねこの死は悲しいけど、かといってせっかく盗んだダイヤモンドは手放せない。・・・・・・・・。 T: ここからどんなことが読み取れますか。 S: 純粹にねこの死を悲しんでいない。どろぼうの抜け目のなさ。ずるさ。・・・・・・・・。 「そして 家に帰って、小さなにわに ねこを うめました。」 T: 主語と述語は？ S: 主語は「どろぼうは」 述語は「うめました」 T: 主語は隠れていますね。どこにうめましたか？ S: 小さなにわに。 T: 誰の家の庭でしょうね。 S: どろぼうの家。 T: 「ちいさなにわ」からどんなことが読めますか。 S: どろぼうは裕福ではない。大泥棒ではない。こそどろ。・・・・・・・・。 T: さて、どろぼうはどろぼうをやめたでしょうか。 S: やめない。続ける。 T: どうしてですか。 S: ダイヤモンドを持ったままだった。裕福ではなさそう。自分勝手。・・・・・・・・。 T: 最後にもう一度考えて見ましょう。ねこはどうして「どろぼうなんか だいきらい」だったんでしょう。 S: どろぼうは純粹にねこをかわいがっていたわけではないから。・・・・・・・・。</p>
2.	<p>○ 英語 (1) 名詞述語 の英訳について</p>	<p>* 主語に下線、述語動詞を○で囲む。 * 英語に直す前に、主語が来る部分に下線、動詞が来る部分に○を「あらかじめ書いておく」。</p> <p>「あるとき、ねこは どろぼうの ねこでした。」 T: それでは、日本語で分析した内容に沿って、英語に直していきましょう。まず、主語と述語です。 S: 主語は「ねこ」で述語が「ねこでした」。 T: そうですね。述語の「ねこでした」ですが、名詞述語でしたね。名詞述語の時は英語では動詞は何を使いますか？ S: be 動詞です。 T: そうです。では、今回のねこはどんなねこでしたか？ S: 「どろぼうの」ねこです。 T: そうです。では、「どろぼう」とは英語で何と言いますか？</p>

	<p>(2) the thief と the thieves の違いについて 考えることで内 容を深く読む</p>	<p>S: ?</p> <p>T: thief といいます。今までの教科書では出てきていませんが、日常ではよく使われる言葉ですから、覚えておきましょう。 それでは thief の所有格はどうなりますか？</p> <p>S: thief's ですか？</p> <p>T: はいそうです。最後に「あるとき」は英語で何と言いましたか？</p> <p>S: Once です。</p> <p>T: そうですね。では、全体を英語にしましょう。</p> <p>S: Once the cat was a thief's cat. でいいですか？</p> <p>T: はいそうです。</p> <p>「ねこは、どろぼうなんか だいきらいでした。」</p> <p>T: もう一度、主語と述語を確認しましょう。</p> <p>S: 「ねこ」が主語で、「だいきらいでした」が述語です。</p> <p>T: 今までは「きらいでした」ですが、ここは「だいきらいでした」です。「王さま」「海」「サーカス」と比べるとどうですか。</p> <p>S: もっと嫌い。</p> <p>T: そうですね。では、今までは「～なんか きらいでした」だったので、dislike よりも hate を使ってきました。でも、「どろぼうなんか だいきらいでした」になったので、hate よりも「さらにきらい」と言う意味にしたいですね。</p> <p>S: very much はどうですか？</p> <p>T: そうですね。それでは、「だいきらい」なのは「どろぼう」ですが、この「どろぼう」って、「ねこ」を飼っている「どろぼう」ですか、それともほかの「どろぼう」もですか？ どちらになるかによって、英語では違ってきます。「ねこ」を飼っている「どろぼう」だったら、the thief ですが、他の「どろぼう」もみんなとなれば、the thieves となります。 さっきの、かおる先生との話をもとに、どっちがいいのか考えてみましょう。</p> <p>S1: 「どろぼう」の手伝いをさせられているから、飼っている「どろぼう」じゃない。</p> <p>S2: 「どろぼう」はみんな悪から、「どろぼう」みんなじゃない。</p> <p>S3: かおる先生の時の話を考えると、飼っている「どろぼう」じゃない。</p> <p>T: それじゃ、「ねこ」を飼っている「どろぼう」にしましょうか。 では、英語にまとめてみましょう。</p> <p>S: The cat hated the thief very much.</p> <p>「どろぼうは、ねこと いっしょに、くらい町を ねこのように しずかに 歩きまわりました。」</p> <p>T: さあ、次はちょっと長い文になります。でも、主語と述語は1つずつしかありません。</p> <p>S: 「どろぼう」が主語で「歩きまわりました」が述語です。</p>
--	---------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>(3) 日本語の表す2つの「ねこ」の違い</p> <p>(4) silent と quiet の違い</p>	<p>T: それでは英語の動詞は何を使いますか？</p> <p>S: walk ですか。</p> <p>T: そうですね。でも、walk は普通、「歩く」という行為だけを表します。「まわる」という意味は表しません。そこで、英語では「くらい町中を(歩く)」と考えます。「くらい町中を」は英語でどう表現しますか？</p> <p>S: 「くらい」 dark、「町」 town だから、in dark town？</p> <p>T: そうですね。in だと「くらい町の中にいる」ということで、町のあちこちを歩いている意味はあまりありません。</p> <p>「船乗り」のとき「世界中の」というときは、英語でどう表現しますか？</p> <p>S: around the world</p> <p>T: そうですね。around the world を使いました。「世界」を「くらい町」に変えればいいのです。</p> <p>S: そうすると、around dark town ですか。</p> <p>T: the も必要ですね。</p> <p>S: around the world ですか。</p> <p>T: それでは「ねこと いっしょに」と「ねこのように」と「しずかに」です。これはみんな「歩きまわりました」を説明しています。一つずつ英語にしていきましょう。</p> <p>ここで「ねこと いっしょに」と「ねこのように」の「ねこ」ですが、おなじ「ねこ」ですか？</p> <p>S: 「ねこと いっしょに」の「ねこ」は主人公の「ねこ」で、「ねこのように」の「ねこ」は普通の？ほかの？「ねこ」です。</p> <p>T: そうですね。だから、「ねこと いっしょに」の「ねこ」は the cat で、「ねこのように」の「ねこ」は a cat になります。</p> <p>それではこの2つを英語にするとどうなりますか？</p> <p>S: with the cat と like a cat でいいですか？</p> <p>T: そうですね。「しずかに」はどうしましょうか？</p> <p>S1: silent？</p> <p>S2: quiet？</p> <p>T: さあ、どちらがいいでしょうか？ silent は「声や音をまったく出さない」という意味です。quiet は「余計な動きや音がない」という意味です。</p> <p>S: 「どろぼう」の足の動きも考えると、quiet がいい。</p> <p>T: そうしましょう。でも「しずかに」ですから、quietly とします。</p> <p>それでは、英語にしましょう。</p> <p>S: The thief walked around the dark town quietly like a cat with the cat.</p> <p>T: それでいいと思いますが、like a cat with the cat はちょっと紛らわしいのと、日本語では「どろぼうは、ねこといっしょに」になっていますから、The thief, with the cat, walked around the dark town quietly like a cat. にしましょう。</p> <p>「どろぼうは、いぬのいる 家にだけ どろぼうに はいりました。」</p> <p>T: 次の文です。主語と述語を確認しましょう。</p>
--	-----------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>(5) 「はいりました」は主語によって使う動詞の相違</p>	<p>S: 「どろぼう」が主語で「はいりました」が述語です。 T: 述語はそれだけですか？ S: 「いる」も述語だ。 T: そうですね。これも述語になります。でも、「いぬのいる」全体で「家」を修飾していますから、ここは動詞を使わずに表現しましょう。「犬を持っている」というように考えると、前置詞が使えます。何でしょう？ S: with. with a dog. T: そうですね。でも、どろぼうが入った家は1軒しかありませんか？ 何件もありますよね。その家毎に「いぬ」がいますから、with dogs にしましょう。 さて、ここで「はいりました」について考えましょう。普通、「中に入る」は英語でどのように表現しますか？ S: go into. T: そうですよ。でも、どうやって入りましたか？ どろぼうですからね。 S1: カギをこじ開けて入った。 S2: 窓を壊して入った。 S3: それじゃ、音で起きるよ。 T: そうですね。普通に玄関からノックしてはいる訳ありませんよね。ちょっと絵を見てください。「どろぼう」の手に何かありますよね。 S: スパナですか？ T: そのようですね。それを使って開けたのでしょうか。と言うことは、カギを壊して入ったのです。「壊す」は英語では？ 中学2年の教科書 Unit 5 で習いませんでしたか。「腕を折る」 <u> </u> her arm! S: break? T: そうです。break into で「どろぼうが押し入る」という意味になります。そして、過去形だから？ S: broke into ですね。 T: はい。もうひとつあります。「家に」ではなく「家だけに」となっていますから、houses だけではだめです。 S: only ですか。 T: そうです。only houses となります。 それでは英語にまとめてみましょう。 S: The thief broke into only houses with dogs.</p>
<p>(6) 複文の英訳</p>	<p>「いぬが ねこに ほえている あいだに、どろぼうは 金庫を こじあけました。」 T: 次の文です。主語と述語はどれでしたか。 S: 「いぬ」が主語で、「ほえている」が述語で、「どろぼう」がもうひとつの主語で、「こじあけました」がもうひとつの述語です。 T: そうすると、2つ「主語」と「述語」の組み合わせがあるということですね。このように2つの「主語」「述語」の組み合わせがある文を英語に直すとき、それぞれを英語に直して、その関係を表す言葉を見つけ、それ</p>

		<p>S: safe ですか?</p> <p>T: そうです。</p> <p>では、次に「こじあけました」ですが、「こじあける」ってどのようにしますか?これも「どろぼうに はいりました」のときのように、「カギを壊して開ける」ということですね。だから、break を使います。でも、「あける」の意味も必要ですから、どんな単語が必要ですか?</p> <p>S: open.</p> <p>T: そうです。break ~ open となります。では、英語でまとめましょう。</p> <p>S: The thief broke a safe open でいいですか?</p> <p>T: そうですね。さあ、これで2つの文ができました。これを一つにつなぎたいと思います。何でつなぐか、「あいだに」でつなぎます。「あいだに」はどんな言葉を使いますか。</p> <p>S: between.</p> <p>T: それは前置詞なので、文と文をつなぐことはできません。文と文をつなぐのは接続詞です。「いぬが ねこに ほえている」と「どろぼうは 金庫を こじあけました」は同じ時間帯に起こっているので、when 「~するとき」でもいいのですが、「~するあいだずっと」というイメージなので、違う単語を使いましょう。</p> <p>S: while ですか?</p> <p>T: それがいいと思います。では、つなげてください。</p> <p>S: A dog was barking at the cat while, the thief broke a safe open.</p> <p>T: ここで気をつけたいのは、従属接続詞の位置です。日本語と位置が反対になります。従属接続詞が修飾語になるべき文の先頭に来るのが英語です。日本語は修飾語になるべき文の後ろに来ます。だから、どうなりますか?</p> <p>S: While a dog was barking at the cat, the thief broke a safe open.</p> <p>T: そうです。</p> <p>「ある日、ねこは いぬに かみころされてしまいました。」</p> <p>T: 次の文です。主語と述語を確認しましょう。</p> <p>S: 「ねこ」が主語で「かみころされてしまいました」が述語です。</p> <p>T: 誰が「かみころしてしまった」のですか?</p> <p>S: 「いぬ」です。</p> <p>T: そうすると、「いぬは ねこを かみころしてしまいました」と言ってもいいですね。この文と絵本の文はどう違うのでしょうか。</p> <p>S: 受動態、受け身です。</p> <p>T: そうですね。文法的にはそうです。でも、どうして、「いぬは ねこを かみころしてしまいました」と言わないのでしょうか?2つの文は何が違いますか?</p> <p>S: ? 主語が違います。</p> <p>T: そうですね。「いぬ」が主語か、「ねこ」が主語かですよね。それに合わせて、述語が変わっているということですね。主語はその文のテーマを表</p>
--	--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(9) 受動態の
用法

		<p>しています。この文は「ねこ」について、言っているのです。「ねこ」がどうなったかが大事なんですね。だから、「ねこ」が主語になるように受動態にしているのです。</p> <p>さて、「かみころす」ですが、これも「かむ」と「ころす」の2つの行為があります。前の「こじあける」もそうでしたが、ここも同じように考えます。「かんだ」そして、結果的に「死んだ」ということです。「かんで死まで至らしめた」と考えましょう。</p> <p>「かむ」、これもまだ習ったことはないですが、日常よく使われる単語ですから、覚えておきましょう。bite です。そして「死まで」ですから「死」が到達点ですから、前置詞 to を使います。「かみころす」は英語ではどうなりますか。</p> <p>S : bite to death ですか？</p> <p>T : そうなります。「ある日」はもう大丈夫ですね。bite の変化は大丈夫ですか。bite-bit-bitten となります。</p> <p>さあ、英語でまとめてみましょう。</p> <p>S : One day, the cat was bitten to death by a dog.</p> <p>T : そうですね。これでいいと思います。ただ、かおる先生の授業で「しまいました」の部分に『予想外にびっくりしている』ということを書いていました。この文でもわかるとは思いますが、『偶然、よくないことが起こる』という意味を強調したいなら、「船乗り」のところでやった、happen to を使うことができます。</p> <p>One day, the cat happened to be bitten to death by a dog.</p> <p>(10) 重文 「どろぼうは、ぬすんだ ダイヤモンドと いっしょに ねこをだいて、夜の町を 大きな声で なきながら、歩きました。」</p> <p>T : さあ、次は、ちょっと長い文です。主語と述語を確認しましょう。</p> <p>S : 「どろぼう」が主語で、「だいて」「なきながら」「歩きました」が述語です。</p> <p>T : そうです。「どろぼうは ~ だいて、~ なきながら、 ~あるきました」となります。</p> <p>「だいて」は「だいた+そして」と考えます。接続詞は何を使いますか？</p> <p>S : and。</p> <p>(11) 現在分詞の用法 T : そうですね。次に「~ なきながら」ですが、この「~しながら」と言うのは、2つの動作を同時にしているということですね。ここでは「泣く」と「歩く」ことを同時にしているということです。それは接続詞を使って言うことができますが、もうひとつの方法として、現在分詞 (~ing) を使って言うこともできます。</p> <p>「泣く」は英語で何と言いますか？</p> <p>S : cry。</p> <p>T : いいですね。現在分詞にすると、crying です。「大きな声で」は「船乗り」のときは cry out でしたね。今回は違う単語を使ってみましょう。</p> <p>S : loudly。</p>
--	--	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

		<p>T: それでは。cry loudly にしましょう。現在分詞にすると、crying loudly ですね。</p> <p>「(どろぼうは) 泣きながら あるきました」となりますが、「～しながらあるく」は英文の語順では「あるく」+「～しながら」の順番が普通です。</p> <p>S: walked crying loudly でいいですか？</p> <p>T: そうすると、ここまでの骨組みをつくりましょう。</p> <p>S: The thief held ~ and walked crying loudly ~ となります。</p> <p>T: そうです。では前の部分を完成させましょう。何を「だいた」のですか？</p> <p>S: 「ねこ」です。</p> <p>T: 英語では</p> <p>S: the cat です。</p> <p>T: そうです。そして、当然、「うでの中に」ということですから、The thief held the cat in his arms となります。</p> <p>S: はい。</p> <p>T: そして「ぬすんだ ダイヤモンドと いっしょに」を考えましょう。</p> <p>誰が「ぬすんだ」のですか。もちろん、「どろぼう」です。でも、「どろぼうが ぬすんだ」とは書いていません。日本語は言わなくてもわかる主語は省略するものです。だから、主語が書いていません。でも、英語では書かなくてはなりません。そうすると、関係代名詞を使って、diamond that he stole となります。</p> <p>もうひとつの方法があります。「どろぼう」を出さずに済む方法です。「～する」側を主語にするのではなく、「される側」を主語にします。そういう文を何と言いましたか？</p> <p>S: 受け身ですか。</p> <p>T: 受動態ですね。過去分詞で「ぬすまれた」という意味になって、名詞を修飾することができます。「ぬすまれた ダイヤモンド」とするのです。過去分詞 stolen を使うと、stolen diamond と言うことができます。こちらの方がすっきりしています。「ぬすまれた ダイヤモンドと いっしょに」ですから、前置詞を使ってできます。どんな前置詞ですか。</p> <p>S: with。</p> <p>T: そうですね。まとめると？</p> <p>S: with a stolen diamond です。</p> <p>T: ところで、ダイヤモンドはいくつあると思いますか。日本語だけではわかりません。</p> <p>S: 1つかな？ 2つ？ 3つ？</p> <p>T: 1つなら、with a stolen diamond です。2つ以上なら、with stolen diamonds となります。どちらでもいいと思います。この絵を見てはどうでしょう。</p> <p>S: 「ねこ」死んだから、盗む途中だったので、1つしかとらなかつた。</p> <p>T: そうかもしれませんね。では、ここでは1つと言うことで行きましょう。では最初の部分をまとめると、held the cat in his arms with a stolen</p>
	(12) 過去分詞の用法	
	(13) 単数・複数によるイメージの違い	

		<p>diamond となります。</p> <p>それでは後半です。「夜の町を」です。これは「夜の町の中を」と考えます。</p> <p>S: in the night town ですか？</p> <p>T: いいですね。さあ、まとめられますか。</p> <p>S: The thief held the cat in his arms with a stolen diamond and walked crying loudly in the night town.</p> <p>「そして 家に帰って、小さなにわに ねこを うめました。」</p> <p>T: さあ、最後の文です。「王さま」や「船乗り」や「手品つかい」のところと同じ構造です。主語と述語を確認しましょう。</p> <p>S: 主語が「どろぼう」で、述語が「帰って」と「うめました」です。</p> <p>T: ここで違うのは、主語が明示されていないのです。そういうとき、主語はどうしますか。</p> <p>S: 代名詞 he を使います。</p> <p>T: 語句の確認をします。「家に帰る」「にわ」「うめる」のそれぞれの英語はどうなりますか。</p> <p>S: come home と garden と bury です。</p> <p>T: そうですね。では、英語にしましょう。</p> <p>S: He came home and buried the cat in the little garden.</p> <p>T: 以上で、「どろぼう」の部分の英訳は終わりです。なにか質問はないですか？</p>
--	--	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

資料 4 生徒の感想（8月29日）

日本語の文を詳しく教えてもらうことで本の内容の理解度も深まりました。英語に訳す時も、今まで習った単語や聞いたことのある単語が多く出てきたため、そこまで難しいようには思わずに取り組みました。「海なんかきれいでした」の「なんか」という言葉は英語ではまったく思いつかなかったので、説明を聞いてやっと理解できる場所もありました。この国語と英語を一緒に行う授業をうけて、日本語をしっかりと理解していないと英語には訳せないんだと思いました。今まで授業でしたところでは、「ねこは海なんかきれいでした。」「ねこは王さまなんかきれいでした。」「ねこはサーカスなんかきれいでした。」というところが、少し迷ったところでした。授業の中でもありましたが、「その海がきれい」というように特定の場所を指しているのか、「海がきれい」と全てがきれいと言っているのかと迷いました。海は海全体がきれいなのかなと思いましたが、王さまとサーカスに関しては、特定の「その王さま」「そのサーカス」ととらえることができるようにも思えたため、はじめは特定のものを指しているのかと思いましたが、先生の話や他の人の考えを聞くことで、すべて全体を指しているのではないかと思えました。ひとりで考えるだけでなく、先生の話や他の人の意見を聞きながら理解して、日本語の意味をとらえたり、訳したりできたので、しっかり考えながら取り組むことができたと思います。また、絵本は同じような構成の文がくり返されているため、英単語を何度も出て来るものなど、新しく覚えることができた単語もありました。1年間取り組むということなので、しっかり理解できるようにしたいです。（安住瑠莉）

「100万回生きたねこ」の絵本を読んだのは高校生になってからなので、授業を通して意味を知ることが多くありました。

あまり深く考えずに読んでいたところも英語に訳すためには日本語ではあいまいなところもはっきりと考える必要があるということがわかりました。日本語の文では主語が隠されていることもありますが、英語では書かなくてははいけないので、文の流れでしっかりと読み取ることが大切であることもわかりました。

「～なんて」や「～してしまい」などの表現の意味を考えることは普段はまったくなく、自然と使っていました。授業で訳す際、より近い単語を使うために日本語の正しい意味は、と聞かれて、よくわからないということがありました。英語に訳すためにはやはり日本語をちゃんと理解していることが前提であるのだと感じました。日本語から英語という流れなので、だいたいの内容を知っているのでとても楽しく授業ができました。日本語の文に合った英単語を考えて、みんなで意見を出し合うということも楽しく、苦手な英語も意欲的に取り組むことができました。

日本語の品詞について理解することによって英語に訳すことがしっかりできると思います。日本語をしっかりと学ぶことは英語を学ぶ上でも大切だと思うので、今後はどちらも繋がっていると考え、より一生懸命勉強に取り組みたいです。

今回の授業を通して学んだことを生かして他の絵本の訳などもやってみたいと思いました。とてもすてきな話なのでこの授業で知ることができてよかったです。詳しい意味を知りながら進めることでさらに物語に込められた良さを感じることができました。この授業で学べてよかったです。（高橋朋華）

「100万回生きたねこ」というお話は、小さい時に読んだことがありました。しかし、こんなにじっくりと読んだことははじめてだったし、ましてや英語にすると聞いたとき、とても私にはできないと思っていました。

まず、題名の「100万回生きたねこ」というところで私は1回死んだら生きては来られないのに、

どうしてこの題名にしたのだらうと思いました。動物であっても人間と同じように1回死んだら、そこで終わりだと思えます。そのような、わかりきっている現実を超えてこのお話を作った作者にとっても感動したし、その発想がすばらしいと思いました。

ねこは王さまのねこになったり、船乗りのねこ、サーカスの手品つかいのねこになったりと、さまざまな人のもとで生きては死んでゆく。そんなねこは飼い主のことが嫌いでした。っていう言葉から、このねこは飼い主から愛されていなかったのかなと思いました。私はそんなねこがとてもかわいそうな気持ちになりました。それでも、ねこは泣くことなく生きてきたのです。

日本語で読むだけでもこんなに難しいお話なのに、英語は絶対にできないと思っていました。しかし、実際にやってみて、ひとりではないですが、一通りできたし、今まで習った単語ばかりでできるんだと知り、復習にもなりました。現実的には絶対にあり得ないお話でしたが、私はこのねこは自分を愛してくれるような飼い主を探し続けていたのかなととらえました。(都築 遥)

「100万回生きたねこ」をはじめて読んだのは小学生の時でした。あの時は「このねこは不思議で意味がわからない話だ」と思っていました。

今回、この授業を通してたくさんのことを学びました。まず、国語の部分で話の内容を理解するところから入りました。その中でいろいろな活用法や言葉の意味から、読み取るねこの世界はとても深いもので、子どもだけでなく大人も読んでおもしろいものだと思います。特に「王さまなんか」や「海なんか」「サーカスなんか」という「なんか」に込められたねこの気持ちと、その対象物の広さには驚きました。パッと見て一文だけで読み取ると全文を通して読み取るのはまったく違うものだと思います。そして、自分で発見や驚きを見つけながら活用を学ぶのはとても楽しいものだと思います。

英語の部分ではとても考えさせられました。私は英語が大の苦手な正直、この授業は乗り気ではありませんでした。本を英訳するのは無理だと思っていました。しかし、国語の部分でこの話の英訳はどうなるのだらうかと気になり始めました。最初はやっぱりとても苦手意識が強かったです。やって行くうちに同じことの繰り返しなので、内容や単語がわかるようになり、楽しくなっていました。今まで英語に苦手意識を持っていたのが、少しなくなったのではないかと思います。これからは頑張って英語をやりたいと思います。(鹿野愛恵)

私はあまり英語が得意ではなかった。今も得意だとは言いがたい。だが、この「100万回生きたねこ」の授業を受けるようになってからは、とても楽しく授業ができています。今は毎週のリーディングの授業が楽しみで仕方がない。

日本語の文を主語・述語・修飾部などに区別し、その関係を明確にしてから英文にすることで、日本語の文と英文が頭でイコールになる。どの言葉がどこに位置するのか、どのような表現になるのか、それがとてもわかりやすい。すぐに英文にしようとする、修飾の関係もよくわからないまま、途中で止まってしまう。しかし、日本語のうちに理解していれば、短い文であれば、自力で解けそうと思える。また、自分が知っている単語で文を作ることができるので、あまり難しいという意識はない。強いて言うならば、接続詞や格助詞などを英文でどういった形にするのか、修飾の際の to や of などの使い分けがわからなくなるくらいだ。

でも、今この授業が始まってからは、以前よりずっとわかりやすいし、英語と親しくなれている気がする。課題で英文の絵本を日本語にするのは何度かやったことがあるが、逆に日本語の絵本を英文にするのは初めてだ。どちらもやっていると、少しずつわかっていっている気がする。さらに、ただ絵本を読んでいたときより、ずっと絵本の中に入り込んで、ずっと考えていると思う。文字に含まれている書き手の思いや自分がその文字から想像することで、さらに物語が進んでいて、ずっと深まると思う。だ

から、もっと頑張って授業を理解しようと思うし、楽しくもなってくる。

(氏家瑞樹)

国語と英語の合同授業というものがはじめての経験で、とても新鮮でした。日本の絵本から作者の心情や日本語独特の表現をどのように英語に訳すかが難しく、なかなか思う通りの訳ができなかった部分もありました。ひらがなと挿絵のみの絵本からどのように物事をとらえるか、というものがよい勉強となり、この授業を受けていくうちに、どのような英単語を並べて表現すればよいか完ぺきではありませんが、理解できるようになった気がします。

また、みんなで考えて、英文を作っていくので、発言の回数が自然と多くなり、一部の人のみが発言するというのがなくなったので、ためになる授業だと感じました。小さいころ何度となく読んでいた絵本を高校生になった今、意味をじっくりと考えて授業に取り組んでいくことに興味・関心を抱いています。みんなで意見を組み合わせながら授業を進めていくのが楽しいと感じました。

英単語の表現の仕方もさまざまで、日本語と英語の表現の相互に戸惑いましたが、その中でも面白みを感じることができました。「なんか」とか「まるのまんま」などの表現は日本語独特のものなので、英文に訳すことは日本の絵本としての面白みが薄れてしまうのではないかと考えています。表現が乏しくなると、面白みが格段に下がってしまうので、その部分はどうかと疑問に思うことです。

まだ、最後まで訳していませんが、今までの授業はとても楽しいので英訳が完成するのがとても楽しみです。

(佐々木萌花)

私はこの授業で「100万回生きたねこ」のお話を英訳しています。国語科の先生と英語科の先生が共同して、授業を進めているので、とても楽しいです。「100万回生きたねこ」のお話を日本語という視点から見て、主語や述語などに分け、そして、それから英語という視点からその日本語を英訳していくので、文の構成や知らなかった単語を改めて知ることができました。私は英語が苦手で、この授業を始めると聞いたときはあまり嬉しくありませんでした。しかし、授業が進んでいくうちに、日本語と英語のおもしろさを知り、次第に国語と英語の授業が少しずつですが、好きになり、火曜日の3・4時間目がいづつも楽しみになりました。この授業のおかげで、英語の本に興味を持ち始めました。同じ題名の日本語と英語の本の内容や文章の書き方などを見て、新たな発見をしてみたいと思うようになりました。「100万回生きたねこ」をまだ、すべて英訳し終わっていないので、英訳がすべて完成し、読み返すのが楽しみです。

(金野麻美)

日本語と英語の文の構成は、まったく違うということがわかりました。まず、日本語で省略されている部分を英語で省略することはできないということを知りました。

日本語の意味や品詞について考えずに、英語に訳すのは難しいと思うし、語り手の言いたいことは何なのか、どの英単語を使うのがふさわしいのか、わからないと思います。しかし、日本語の意味や品詞から読み取っていくことで、どのようなことを言いたいのかがわかるし、日本語の意味にいちばん近い英語に訳すことができると思いました。日本語の意味を理解したうえで英単語を探すと、今まで習った単語が多く出てきたり、使ったことがある単語があったりして、それほど難しいものではないのかなと思いました。まずは、意味をしっかりと読み取ることが大事なのだと思いました。(佐藤夢里奈)

「100万回生きたねこ」の授業をしてみて、とても新鮮な授業だったと思いました。最初のかおる先生の授業では、この言葉がどの動詞にかかっているか、また、どのような意味を含んでいるかなと詳しくやり、「なるほど」と理解できるところがたくさんありました。それを踏まえて忠夫先生の授業はとてもわかりやすかったです。日本語をしっかりと理解することで、英文に直すときも楽だと思いました。

言葉の度合いの大きさと単語が変わったり、単語をどこに置くかによって意味が変わってきたりなど、多くのことを学びました。

このような授業はとてもよい授業だと思いました。最初にどのような内容で、どの言葉を修飾しているのかなど、日本語を理解できるし、それを理解したうえで英文に直すこともでき、とてもわかりやすかったと思いました。英文を作るときには日本語を理解することが大事だとわかりました。普段からの文はどのような意味が含まれているのかと考えながら、本を読みたいです。この授業は国語も英語も一緒に学べるので続けていってほしいと思いました。違う物語もやってみたいと思いました。

(佐々木ゆかり)

私はこの学習を通して、本当に今まで知らなかった文法や単語をたくさん勉強できたと思います。また、日本語の文で少しだけ変化するだけで、英語の単語が変わるとは、とても驚きでした。たとえば、「ねこは王さまなんかきらいでした」の一文は英語に直すと The cat didn't like the king. だと私は思っていました。でも、The cat hated the king. だったんですね。私自身は hate という単語の意味を知っていましたが、まさか、こんなところで使うとは思いませんでした。また、日本語も改めて詳しく学べたと思います。連体修飾、助詞、修飾部、接続助詞、格助詞、自動詞、他動詞、係助詞など、これらすべてを説明してくださいと言われても説明できそうになかったのですが、このような授業を通してこれらを説明できる自信がついた気がします。あと、英語×国語のコラボレーションは非常によかったです。もちろん、今までの人生でこのような授業は味わったことがありませんでしたし、ある日いらしていた大学の先生たち（宮城教育文化センターの方々の間違いだと思います）も「この授業は日本で初めてですね。」と仰っていました。この授業を受けることができる私たちは本当にラッキーだと感じました。ただやっぱりひとつだけ気になっていることがあります。「100万回生きたねこ」と題しているのに、回数分だけ（話を）書けばいいのにと思ったりしています。（鈴木智也）

「100万回生きたねこ」を学習して、かおる先生が文の単語ひとつひとつに込められている意味を解いていき、その意味の状態を保ったまま英語で表現するという作業をすることで表現を豊かにすることができたと思いました。

日本語の文の中にも繰り返し使われている言葉や急に違う言葉を出して筆者から読み手に何かを伝えようとしていたりしていました。

それを英語にするのが難しかったです。ですが、忠夫先生はかおる先生が詳しく解説した単語の表現を英語にし、さまざまな表現のしかたがある中で、もっとも適切な表現方法をみんなと考えながらやる授業のおかげで自分も少しは理解できたと思いました。

また、文自体は長くなく読みやすかったので、このように文が長くない本を意味を考えながら英語に訳す授業をこれからも取り入れてほしいと思いました。（今津響也）

この授業を通して、英語の文の構造について少し理解することができたと思います。私は、中学生の頃から英語が苦手で、長文を見るといつも嫌いになっていました。ですが、高校に入ってから英語はまず、動詞を見つけ、次に前置詞や接続詞に印をつけていくものでした。（1・2年では英文に最初から記号がついています。）その授業のおかげで何とか文の構造や英文の訳し方を学ぶことができました。

この「100万回生きたねこ」の授業は、最初に日本語で書かれている話の中身、構造を探っていきます。ですので、作者がどんな思いでこのシーンを書いたのか、登場人物はどのような人柄かを詳しく知ることができました。物語に深く入り込むことができるので、とてもおもしろいです。

また、主語・述語などに印をつけた文章を、次は英語に直していきます。日本語から英語に直すのは、

とても難しいはずなのですが、日本語の文の構造について調べた後の作業なので、意外とスムーズに英語にすることができたと思います。このように、この授業は普通に英語の授業をするよりも、理解できました。
(遠藤勇太)

国語と英語を同じで一緒に授業をするということですが、同じ「100万回生きたねこ」でも、国語と英語によっては教え方がやっぱり変わるというのがおもしろいです。あと、国語では英語の意味や品詞のことまでやるので、すごいなあと思いました。あとは本の文章の一文字一文字なんか気にしたことなかったけど、本は一文字ついているか、ついていないかだけで、読者に与える感情とかが違うと言うことがわかり、すごいなあと思いました。あと、最初に国語で文法のことをやることによって、英語をやるのが、ちょっとはやりやすくなっていると思います。最初からすぐ英語に直そうとするよりも、日本語の意味をわかっている方がよいと思いました。
(赤間紀果)

国語で作者の意図などを学んだあとに、英語でも同じものを学ぶのは新しい発見と今まで経験がないことなのでとても楽しいです。

英語にしかない表現や日本語にしかない表現があり、日本語の表現の難しさや英語の表現のバリエーションの広さに驚きました。

また、「100万回生きたねこ」のような教材を使うのも、授業が進むにつれて話も進むので、毎回楽しいです。

このような国語と英語を同時にやる授業は英語だけでは理解が難しかったことも、国語でやった内容を見ながらやることでとてもわかりやすくなるのでありがたいです。
(早坂重信)

国語と英語の2人の先生が一緒になって、一つの授業をするというのは、はじめは驚き、戸惑いましたが、今ではとても充実しているなと思います。

一冊の絵本である「100万回生きたねこ」は授業と関係なく読んだことがある本で、内容も知っていました。しかし、国語として読んでみると、見えなくともわかっていた主語があったり、場面の解釈が人それぞれで違っていたりと、驚くことがありました。自分なりに読んで理解していても、『国語』として考えることで、授業とは少し違う感じがしておもしろかったです。

次に英語に直すところですが、これはとても難しいと思いました。しかし、回数を重ねるにつれて、どんどんやり方がわかるようになりました。単語一つを選択するにも、場面と状況を考えないといけないので、なかなか自分で正解を見つけるといのがまだまだできないですが、国語として解釈をしてから英文にするので、これが来るかな？という見当がつくようになって、自分だけではできそうになくても、みんなとすればだいたいできるようになりました。

難しいというのは変わりませんが、とてもやりがいと発見があって楽しいなと思います。(今野靖子)

私がこの「100万回生きたねこ」の授業を受けて思ったことは、日本語で主語・述語を確認することで、次の英文を作るとき、何がどうなるのか予測をつけやすくなるなということです。今までは感覚的にこうかな、ああかな、とやっていたのですが、英語には日本語と同じように順番がちゃんとあるということを知ることができました。また、日本語ならではの独特な表現を使うときや強調したい部分は英語も置き方が変わったり、単語が変わったり、そういう文の作り方もあるのかとおもしろく感じることもできました。日本語から英文に直すことができるというのは同時に英文を日本語に和訳することもできるようになるということです。どれが主語でどれが述語なのか、ちゃんと見極める力がついたときに、このことを実現することが可能になると思います。これができるようになれば、より楽しく授業を

行うことができ、勉強への意欲も増していくので、とてもためになる授業だと思います。(阿部華子)

「100万回生きたねこ」の日本語から英語に訳すという授業を受けて、最初はどのくらい難しいものなのかと思っていましたが、実際やってみると、そこまで難しいものでもないと感じました。今まで習ってきた単語ばかりでできたし、先生の話聞きながらやっていると、とても簡単に訳すことができました。

国語担当のかおる先生と英語担当の忠夫先生が2人で授業をするというのは授業を受ける側からすると、とても楽しく感じました。日本語の主語や述語をかおる先生が説明し、それを忠夫先生が英語に訳す。日本語の勉強にもなるし、英語の勉強にもなって、とてもいいと思います。

この授業を受けるまで、単語や英文をあまり理解することができませんでした。日本語から英語に訳すということで、文の作り方もわかったし、今まで以上に、興味を持って取り組むことができました。この授業をすることで英文は意外と単純なものなのかなと少し思いました。

まだ、英語に訳す授業は終わっていないので、今後も集中して授業に取り組んでいきたいです。

(富栄秀喜)

この絵本は幼稚園のころに1・2回読んだきりで、正直、あまり覚えていませんでした。今回授業で英訳することを知って、最初はおもしろそうだなと思いましたが、思っていたよりも難しく、英単語にもたくさん意味があることを知りました。国語の先生と一緒に授業をするというのが、どうしたことなのか、あまり理解しないまま授業が始まり、英語は日本語を理解していないとできないということがわかりました。子ども向けの絵本を英訳するなら、簡単なのではないかと思っていた自分がばかでした。日本語を理解するのがとても難しく、一文一文、進めるのがとても大変でした。その一文を英訳するために、深く、深く理解すると、自分が思っていたストーリーと全然違ったりして、英語が苦手な私でも、楽しんで授業を受けられます。

(岩井香菜子)

動詞や名詞、その他のさまざまな品詞について、ひとつひとつ丁寧に説明してくださるので、とてもわかりやすかったです。文法を考えながら訳すことにとっても慣れてきたと思います。また、物語なので想像しながら、楽しみながら授業を受けることができました。

「100万回生きたねこ」は、最初はとても不思議な物語だと思っていました。授業を受けていくうちに、とても深い話で感動しました。生き物は人生に満足しなければ本当の死を迎えることはできないのではないかと思います。100万回も生き返って、いろんな飼い主に愛されてきたねこですが、これまで自分を好きになったことがなく、死んでいました。しかし、ある一匹のねこを愛し、愛され、自分も好きになり、人生に満足できたので、再び生き返ることなく、死んでいったのではないかと思います。

日本語と英語の両方で学ぶことで違いもよくわかるようになりました。文法の違いや単語の意味など、理解することができました。リーディングのみ、国語のみの授業より、2つの科目を同時に行うことでとても充実感があり、関心が高まったと感じます。この物語の授業を受けて、人生の中で人を愛すること、愛されることは必要不可欠なのだと思います。

今までにない新しい取り組みで、とても楽しく学ぶことができました。この授業で学んだことは、これからの人生に生かしていきたいと思います。

(門脇 瑠美)

資料 5 生徒の感想（12月9日）

「100万回生きたねこ」を英語に訳する授業を受けて、まず、日本語のほうではとても簡単な文章なのだが、時間をかけてゆっくり読むことによって、普通に読めば意識しないようなところまで追究することができた。たとえば、主語、述語はもちろんのこと、修飾語や並列、強調といった文章の効果など、細かいところまで意識することにより、さらに興味深く、おもしろく読むことができた。また、形象読みをすることによって、文の表現には書いていない、裏側まで読み取ることができ、作品の中の情景や登場者の気持ちを想像することができた。これから「形象読み」を意識してやっていきたいと思う。

英語の方では、やり始める前は絶対に難しいと思っていたけど、実際にやってみると、思っている以上に難しくなかった。むしろ、中学校の時から習ってきた単語ばかりで簡単だった。文章を作るのも、規則に従ってやれば、簡単にできた。自分たちで英語に訳したときも、授業で学んだことを応用すれば、あまり難しくなかった。

この「100万回生きたねこ」の授業を受けて、国語も英語も、規則に従えば、簡単に理解できるということがわかった。

こういう授業をする機会はなかなかないと思うので、これで学んだことを大切にしていきたい。

（富栄 秀喜）

はじめは、日本語と英語では私の中で違いが多いので同じに授業をすることはできないと思っていました。しかし、丁寧にやっていく中でその考えは変わりました。まず、最初に行った国語からの目線で読み解くということは、一見、普段と変わらない国語の授業だと思いました。しかし、実際そうではなく、主語や述語、品詞や、活用法などを一から教わり、普段よりも長い時間をかけて、丁寧にやってみました。その中で、日本人で日本語を使う人なのに知らないこと・わからないことが多いこと、日本語を使いこなせていないことを学ぶことができました。そして、英語のところで、1つの意味でたくさんある単語があると始めて知りました。いろいろな単語があって、同じ意味のようでちょっと違う意味だったり難しかったです。もともと英語の苦手な私にとってはとても大変でしたが、楽しかったです。そうしている間に何度も使っている単語がわかるようになっていたり、意味が理解できてくるのが新鮮でした。残りの授業回数が少ないですが、もっと頑張ってみようと思えるように参加できるようにしたいと思います。

（鹿野 愛恵）

変わりました。

国語の授業では、以前まではただ単に文章を読むだけでしたが、深く読み取ろうと形象読みをするようになりました。情景を浮かべながら読み進めることで、キーワードとなるような言葉が見えてきたり、心情などが読み取れたりするようになりました。また、深く読むことで自分が疑問に思ったことに対する答えが出てきたり、新たな発見をすることができると思いました。自力で形象読みをするのは難しいですが、内容を読み取りやすくなったと思います。

英語の授業では、線・丸・線で主語、動詞、前置詞などを見つけて、区切っていくことで、訳すのが少し楽になりました。以前までは、主語や動詞を探して一気に訳そうとしていましたが、英語の基本を改めて学び、少しずつ訳していくのが大切なのだとわかりました。一気に訳そうとせず、順番に少しずつ訳すことで、内容を理解しながら訳すことができると思いました。また、国語と英語の授業を同時にすることで、まったく別物だと思っていたのですが、似ているところがあるのだとわかりました。

（佐藤夢里奈）

「100万回生きたねこ」を国語と英語の両方で受けることによって、少しずつですが、国語や英語に対する考えが変わったと思います。

以前はあまり深く考えずに国語を受けていました。しかし、この授業で深く読み込んでいかなければならないということを学びました。深く読み込むことで内容が頭に入り、その場面毎の情景が浮かぶようになりました。また、主語や述語、助詞などを確認していくことで、今、どのようなことが起きているのか、どのような状態なのかがわかるようになりました。1つ1つの言葉が「強調」や「並列」などを表していることもあるので、言葉に気をつけながら読み進めなければいけないと思いました。作者の思いが込められている文もあり、深く読んでいかなければならないことがわかりました。

英語も以前は「読めればいいや」「書ければいいや」という気持ちで授業を受けていました。しかし、この授業で国語と同様に深く読まなければならないことに気づきました。内容を理解し、その文にあった単語を見つけることは大変だと思いました。「ぐるぐる」などの表現も内容を理解しないとどの単語を使うのか、決められないのだとわかりました。また、どの文法を使えばよいのかも、内容を理解していなければできません。

これからの国語や英語はしっかりと内容を理解できるように深く読み込んでいきたいと思います。

(佐々木ゆかり)

「100万回生きたねこ」を受け、文字の数か少ない文章の中でたくさんの表現がされていることを知った。ただ読んだだけではわからないような表現があり、それを理解していくことで物語の内容を深く知ることができるようになったと思う。

英語では日本語の細かい表現を翻訳できるか疑問だった。だが、今まで習ってきた英単語でも表現することができた。強調という表現方法も倒置法という形であったり、英語でも思いをしっかりと伝えられるのだと感じた。

これからの授業では、日本語、英語ともに筆者の表現を感じ取られるようになり、自分の思いを表現できるよう工夫していきたい。

(今津 響也)

私は英語に対してとても難しいという印象を持っており、最初に絵本を英訳するというのを聞いたときは自分はまったくついていけないだろうなと思いました。しかし、実際授業を受けると、まずおる先生が本の内容をわかりやすく一文に区切り、主語と述語やその他の品詞などまで説明していただき、それまであやふやで覚えていた国語の文法も改めて習うことができ、内容への理解が深まりました。その次の英語ではほぼすべてが一度習ったことがある単語で驚きました。案外知っている単語も多かったり、知らない単語なども授業の中で詳しく説明を受けたので、素直に頭に入れることができました。この国語と英語が同じ、この授業を受けて、何より驚きだったのが英語と日本語のルールの違いです。英語と国語は主語と主語、述語と動詞が同じで並びかえて作っているというルールを教えていただき、英語を覚える上でとても大きなヒントになりました。

(早坂 重信)

とても変わりました。

以前は国語の文章を読む際、主語や述語を考えて読んでいませんでしたが、「100万回生きたねこ」の国語・英語合同授業を受けて、もっと品詞を意識して文章を読んでいこうと考えが変わりました。

また、国語と英語の文法の違いや品詞の場所の違いなどを詳しく学べた授業だったので、他の国語・英語系の授業にも活かしていけると感じました。

そして、この合同授業の中で、物語に込められたメッセージや深い心情まで読み取ることができ、とても充実したものでした。この経験から、物語を読む際は、人物の気持ちやメッセージにもっと気をつ

けて、深いところまで読み取っていくことが大切なのだと考えるようになりました。

英語に訳す際は、1つの日本語に対して、さまざまな英単語が当てはまり、どれが一番、その場面に合っているのかを見極める力も必要だと感じました。このようなことから、以前よりも国語や英語に対する考え方がとてもよい方向に変わったと思います。(門脇 瑠美)

今回、「100万回生きたねこ」を国語と英語とを併用して読んでみて、いつもより深読みができたかなと思います。

まず始めに、国語的に、一文一文から、主語・述語を見つけて、連用形や連体形を文節毎につなげていくことは、普通の国語の授業ではここまで細かくしないので、戸惑いもしましたが、確認しながら読むことで文がとてもわかりやすくなったなと思います。

次に英訳していきますが、ここでは改めて英単語の多さに驚きました。また、意味を見ても似ているものが多くて、どれを使えばいいのか、自分では正しいと思っても別な単語の方が正確なことが多いので、まだまだだなと実感しました。

最後に、国語と英語のどちらにも共通していることは、登場人物の感情をどう表すのか、ということです。ひとり一人違った読み方をするので、感情が曖昧なところはどう英語で表現すればいいのかわかりませんでした。

今まで数ヶ月「100万回生きたねこ」をやってきて、翻訳の難しさを知りました。国語と英語をどちらも理解してこそだなと思いました。(今野 靖子)

はい、少し変わりました。やはり、この形の授業は始めて受けましたし、これを通して国語、英語の深い関わりやはっきりとした違いを感じられたと思います。

英語は1つの単語でも、たくさんの意味を持ち、それを使ってたくさんの表現ができますが、あまり日本語はそういうことがないと思います。今日の授業でも「グルグルと のどを ならした」という言葉を purred という、たったこれだけであっさりと変えられることに少しびっくりしました。このような点では、日本語より英語の方がカジュアルで使いやすく、しっかりと覚えると、とても便利な言語だと感じました。

ただ、英語に対して不安なところもあります。僕は美里町文化会館で劇をしました。そのキャストの一人にテイラーさんという名のアメリカの方がいたのですが、その方と練習中などたくさん英語で話しました。とても楽しかったです。ある日、僕はテイラーさんに“*This is a cheese, isn't this?*”と聞きました。しかし、テイラーさんはそれが聞き取れなかったようでした。その時に僕が思ったのは、発音が少しでもまちがえると、まったく内容がわからなくなり、違う意味になるのだと思いました。これからは、より一層発音に注意したいと思いました。(鈴木 智也)

「100万回生きたねこ」を受けて、国語や英語の授業に対する考え方は変わったと思います。「現代文探求」の授業では、説明文や物語、さまざまな分野の文章について考えていくのですが、物語は当然その場の状況をイメージすることはできていましたが、今回の「100万回生きたねこ」を受けてみて、違う視点からものごとを考えてみたり、深く考えて取り組むようになりました。また、説明文などの難しい話題であっても、以前は字を並べて読み、そうなんだと無理矢理解釈して、その文章を理解している気になっていましたが、最近は説明していることをされているものの状態、変化をイメージできるようになり、深く文章を読み込めるようになりました。イメージできたものを身近なものにたとえて、納得していく力を身につけることができていると思います。

英語の授業に関しても、同じことが言えます。説明されている文の中でイメージ、強調している部分

はどこなのか、伝えたいことは何なのか、前よりも考えるようになりました。

私はこの授業を通して、イメージする力、つまり想像力がついたことで文章を深く読めることができたと思います。(阿部 華子)

私はこの授業を受けて、国語や英語の授業に対する考え方が変わりました。

国語という面では、この授業で、一文ずつ日本語の意味をかおる先生に解説してもらいました。これにより、今までわかっていると思っていた言葉の意味をより深く理解することができ、日本語のおもしろさを見つけることができました。また、今まで国語の授業では、なかなか理解できていなかった、連体修飾や連用修飾などといったことも、今になって、簡単な文章なのですぐに理解することができ、よかったです。

英語という面では英語の文章を書いていくときに、日本語の深い意味をとらえ、それに合った単語を組み合わせる文章を作ってきました。一つの言葉でも、その言葉の中には、深い意味があり、それに合った英語の単語を組み合わせるには、やはり、英語と国語という面での、読み取りの力が必要になってくるなと思いました。この授業を受けて、今までは、国語も英語も難しく、なかなか理解できていないことが多かったのですが、国語と英語のおもしろさや、ひとつひとつの単語の意味の深さを知ることができ、とてもよい機会だなと思いました。(今野 麻実)

私はちょっと変わったと思いました。

まず国語の方で、本はただ読んでいたけど、実は作者のいろいろな思いがこもっているのだとわかりました。注意して読まなければ、気にとめないところや、前の文とのつながりなど、いろいろ気にとめるようになりました。でも、それはあくまで自分の考えや深読みにすぎません。実際に作者がどう思って、その本や文を作ったのかという、本当のところは作者にしかわからないのです。ですので、読む人によって、その人だけの感じ方があるのだということがわかりました。

英語の方では、直訳するだけが英語の文じゃないんだと思うようになりました。重要な部分は前に書いたり、代名詞やいろいろなことがわかりました。日本語をそのまま訳した英文では、英語と日本語を照らし合わせたとき、暖かみとか、臨場感とか、いろいろ感じ方が薄くなったりすると思います。だから、直訳ではなくて、その場にふさわしい単語を選ぶべきだということを考えるようになりました。たぶん、これが映画の字幕とか、歌の日本語版(Let it go)とかにつながっているんだと思いました。この「100万回生きたねこ」のこの授業を受けて、このように日本語と英語の違いとか、そういうのを感じるようになりました。(オノマトペとか)(赤間 紀果)

私は、この授業を受けてみて、日本語がとても難しいと思い、国語の授業をもっと頑張ろうと思いました。

表現のしかた次第で、読み取り方も変わってくるので、難しかったです。英語は一つの単語にたくさん意味があって、おもしろいなと思いました。私は OCI の授業で絵本の翻訳をやっているので、この授業が少しでも役立てばいいなと思いました。

正しい日本語を学び読解力を上げれば、このような授業をもっと楽しめるのではないかなと思います。そのために、国語の授業を今よりもっとまじめに受け、読解力を身につけたいと思います。

私は英語が苦手な単語を覚えるのも苦手なので、もっと集中して、授業を受けようと思います。正直、はじめはこの授業をやって意味があるのかなと思っていたけれど、やってみると楽しいし、自分がどれほど勉強不足かわかりました。そのため、国語と英語に対して、少しずつ興味を持てるようになりました。この調子で残りの授業も頑張ろうと思います。(岩井 香菜子)

私は日本語の絵本を小さい頃から読んできて、主語や述語を授業のように深く追究したことがなかったし、あまり気にせず、ざっと読んでいました。また、「英語に訳してみよう」とか、英語の絵本を読むことはめったにありませんでした。なので、今回の授業を受けて、こんなに日本語と英語はつながっていることを知り、今までとは考え方が変わりました。

国語では文を読むときは、まず、主語と述語、それに加えて、修飾語などを明確にして、どんな物語なのかを場面毎にしっかり理解して読むように心がけ、その場면을思い浮かべながら読むとイメージが付きやすいことがわかりました。

また、英語では日本語での主語と述語がわからないと訳すことができないつらさがよくわかったので、自分でしっかり見つけることが大切だと思いました。そして、最初から私に訳せるはずがないと思い込んでしまっていたが、今まで習ってきた単語や基本的な文法で、できてしまうことに驚きました。なので、基本的な文法をおこたらずに勉強し、身につけていかなければいけないと思いました。

私は国語と英語はまったく別のものだと思っていたので、どちらかができなくても、片方には影響がないと思っていました。しかし、いっしょに勉強してきて、国語の能力をしっかり身につけておかないと英語に訳すところまでたどり着くのが厳しいということがわかりました。 (都築 遙)

「100万回生きたねこ」の授業を受けて、少しは考え方に変化が出たと思います。

まず、絵本を使うことと、国語と英語の授業をいっしょに行うという点が今までと異なっていたため、文を読むときの意識が変わりました。リーディングの授業で宿題も含め、物語を和訳することはありましたが、その時は「100万回生きたねこ」をするときほど、物語の内容を深読みせず訳していました。単語毎に訳し、つなげていくということをしていて、細かな内容までは見ていなかったと思います。でも、「100万回生きたねこ」の授業で、「日本語を読み、しっかり理解してから、英訳する」というようにしていたことで、訳すときも日本語で読み深めることで物語の場面や登場人物の様子や心情などを考えて、思い浮かべることができ、英訳するときも、その場면을イメージしながら、その場面や様子、心情にもっとも合った言葉を選び、訳することができたと思います。

日本語の物語を読むときに、内容をしっかりと読むことが大切であるように、英語に訳す時も、しっかりと内容を理解して取り組むことが大切だと思いました。また、今まで英訳は難しいとしか思っていませんでしたが、日本語をしっかりと理解していれば、できるんだと思いました。難しい単語もありましたが、今までに習ったことのある、知っている単語がほとんどでわかるころもありました。英訳することに対する対抗が以前よりもなくなったというのが、私の授業に対する考え方が変わったところであると思います。 (安住 瑠璃)

私はこの授業を通して、さまざまなことに対して考え方が変わりました。

国語の授業では物語を読むときに、この文章の作者がどのようなことを考えて書いたのかと、自分で考えるようになりました。実際、意識して文章を読んでみると、主語が隠れていたり、動作の様子がしっかりと想像できたりと、今までは何気なく読んでいたことに変化がありました。また、この単語がどこを修飾しているのかという点もはっきりと理解できるようになり、あやふやだった部分も読み取れるようになりました。

英語の授業では、まず主語と動詞の部分がしっかりとわかるようになりました。日本語から英語にする問題も、その反対の英語から日本語にする問題も以前より解けるようになりました。特に文章の中に二つの主語と動詞があるものに対して苦手だと思えることが多かったのですが、しっかりと読み取ることが大切だと気がつき、以前よりもやってみようという気持ちが強くなりました。

英語でも日本語でも、文章を読み取るということは大切だと思います。「〇〇だ」ということは、つまり「△△だ」というように同じ意味で言い換えることがとても重要で、そうすることで文章を書いた人がどのようなことを伝えたいのかわかると思います。これは「100万回生きたねこ」の授業を通して考えたことです。文章を読むときに何となく想像していたときよりも深く読み取ることで、よりはっきりと想像でき、物語がおもしろく感じられるようになりました。(高橋 朋華)

正直言うと、授業に対する考えが変わったか否かという、さほど変わっていないような気がします。国語と英語の違いは文章構成が第一に考えられると思います。主語、動詞、助詞、形容詞など並びかえて問題に取り組む作業は日本語と英語の相違点が理解できたので、その点に関しては合同授業として受けてよかったと思います。また、日本語は主語が抜けている文がよくあるけれど、英語に直す際には何が主語になるのかを見つけ、書き加える必要があったので、難しいとおもしろみがあると、感じました。

日本語のオノマトペは、英語ではあまり活用されていないので、英訳の際にはどのように表現するか考えることがおもしろかったです。作者、あるいは主人公（今回は人ではなく、ねこですが）の隠れた心情を読み取る力が身についたかなと思います。英語と日本語は相違点が多いので何を言えばよいか、うまく言えません、その文に込められた思いや訴え、本当に小さな感情を読み取ることで、視野を広げて解釈することができるのではないかと感じました。(佐々木 萌花)

今までは、英語は英語、国語は国語で考えてしまっていた。だから、英訳、日本語訳が考えにくかった。しかし、これまでの授業で、日本語から主語、述語を考え、状況をイメージすることで英語に訳す時に、理解しながらできた。日本語と英語はつながっていると気づくことができた。

一つの英単語の中に、多くの日本語の意味が含まれていたり、一つの日本語を複数の英単語で表現したりすることがとてもおもしろいと思えたり、教科書に書いてある英文をもっと違った言葉で表せないかと考えるようになった。そういう点で、私の考え方は大きく変わったと思う。

日本語のひとつの文を詳しく掘り下げていけば、そこからさらに多くの景色が見られる。それを意識しながら、英訳するからこそ、とてもよい英文ができる。そういう勉強ができたおかげで、国語もただ文を読むのではなく、深いところまでイメージしながら考えたいと思うし、英語を訳す際も日本語でのイメージを大切にすることで、適切な言葉が出てくる。

日本語と英語はつながっていて、だからこそ、どちらもしっかり勉強していかなければいけないと思えるようになった。(氏家 瑞貴)

変わったと思います。

この授業を受けてどのように英文を訳していけばいいのか、少し理解することができました。今までは英語に対して、ただただ苦手だという意識を抱いており、なかなか授業に取り組む気になれませんでした。英語の長文を見るだけで、嫌になっていました。ですが、「100万回生きたねこ」の授業を通して英語というものの楽しさというのを感じることができました。物語を日本語で勉強してから、英語に訳す作業を行うので、とてもスムーズに頭に入ってきました。

この授業を受けていく中で、英語だけでなく、国語にも感じたことがあります。それは国語（日本語）ができなければ、英語を理解するのは難しいということです。これは今まで何度も言われてきた当たり前のことですが、「100万回生きたねこ」を通して改めて実感することができました。

(遠藤 勇太)

資料 6 研究授業参加者感想（9月2日）

（平成26年9月2日）

今日、授業を見せていただいて感じたことは、生徒がいきいきと授業を受けてるなあということです。私は今年度初任として志津川高校に赴任したばかりなので、読みであったり、生徒への発問の仕方であったり、参考になるところが多くありました。主語と述語を中心として授業が進められていましたが、やはり主語と述語が分からないと生徒が自分の力で文章を読み進めていくことはできないと改めて感じました。実際に授業をしていて、特に古文において主語と述語という文の構造を明らかにすることで内容理解に取り組みやすくしていきたいと思います。 志津川高校

このような授業を受け続けた生徒は、言葉に敏感となり、物語をより深く読み取れるようになるなどだろうと感心して拝見させていただきました。普段の授業ではされているのかもしれませんが、多様な解釈が期待できる場面では、もう少し生徒同士で話し合わせてもよいのかなと思いました。（どろぼうのねこへの気持ちやどろぼうの人となり・善悪など）授業改善に役立てていきたいと思います。ありがとうございました。 加美農業高校

今日は授業を見せていただきましてありがとうございました。このように同じ題材を国語と英語の2つの視点から読み取っていくことは、とても興味深いものでした。

日本の文学作品を英語に訳したものの、英語の作品を日本語に訳したものの比較など授業で行うのもおもしろいと思いました。

また主語の省略という点では古典にも通じるものがありました。

生徒さんの感想にも感動しました。一般の生徒さんのあいさつも素晴らしいものでした。今日はありがとうございました。 多賀城高校

文化祭の振休なので来てみました。かおる先生も忠夫先生もいい仕事しているなと思いました。

生徒の反応が良く、ふだんから良い関係を築いておられるなと思いました。ありがとうございました。

教材選びが大事なポイントだと思いましたが、教科書だけ教えていけばいいのではなく、教師も普段から本を読んで、能動的に教材を探すべきだと思いました。一時間でまとまる長さもポイント。他教科（私は国語です）と協力して授業すると一人で作るのでは見えにくい理解ができるなと思いました。そのためには他教科の先生とも親しくして、いろいろな話をすべきだと思いました。文法の説明に終始するだけなら逆効果だと思ったけれど、それが理解の深さにつながっていたと思う。

文法をどのように授業の中で扱ってよいかわからなかった（自分自身古典文法は習ったが口語文法は系統立って習っていない）ので、手がかりになった。

現代文の授業、小森先生は生徒の感想を十分引き出しておられて、普段指導しすぎて答えを暗記させてしまっているのかと反省した。

英語の先生と国語の先生が議論するのを生徒が聞くと言う形をはさむのもとても良いと思います。

自分の授業の中でどのように取り入れられるか考え中です。

仙台南高校

ありがとうございました。

国語の授業のイメージを一新できました。板書を映す作業が中心になりがちな国語の授業ですが、生徒とのやりとりだけでこれだけ深みのある国語の授業を展開できることに感動しました。

主語述語をていねいに読み取り、生徒とのやりとりによって、作品の理解をこれだけ深めることができることに感動しました。

私も教材を何回か読んだことがあります、高校生の教材としてこれだけ活かすことができるのですね。とても勉強になりました。

生徒とのやりとりがちょっと同じメンバーになりすぎたかもしれません。他のメンバーにも意見を出してほしかったです。

南郷高校

教材に「100万回生きたねこ」を選ばれている点で、とても興味がわき、勉強させていただきたいと思い、参観させていただきました。

教材選びに納得でした。ストーリーの区切れや1回の時間配分を2教科で行ううえですばらしいと思いました。

1回のストーリーの中の1文1文をていねいに、文法や言葉の意味を深く楽しく生徒の感性を磨きながら展開される授業に学ぶところが非常に多くあった国語の授業でした。発問や生徒の考えを受け入れての切りかえし、本文を忠実によみつつ考えさせる授業の展開がとてもすばしかったです。

それを受けての英語は、文章の構造を理解して英訳をしていくのでわかりやすくひきつけられました。穏やかな口調かつ、生徒の知識を引き出しかつ文法や前置詞等の理解を深めさせて、授業を展開され、授業に引き込まれました。

国語の授業と同じ教材を使い授業することにより、双方に効果をもたらす授業の展開、大変勉強になりました。国語における読みの基本をしっかりと確認しながら理解を深めさせる授業だと実感しました。大変勉強になりました。

ありがとうございました。

加美農業高校

以前、英語の授業で、スラッシュ毎に訳が書かれている英文を生徒に見せたところ、バラバラになっている日本語がよく分からないという感想がありました。英語の理解の前に日本語そのものの理解ができていないのではないかとという疑問が残りました。

生徒たちは、字幕の映画を見るのも苦手だとよく言っています。日本語それ自体の能力も高めなければ英語力が伸びないのではないかと思います。日本語の力がかなり落ちていることを認識しなければならぬと思います。今日の授業はそれらの疑問に答えていただける素晴らしい授業でした。日本語そのものの読解の仕方を学び、それを活かして英作文を行うというのは、理想のかたちだと思いました。

英語の授業は英語で行う動きは望ましい方向に行っているのだとは思いますが、英語と日本語の構造の違いをどこかでしっかりと身につけなければ中途半端な習得に終わってしまうと考えています。

生徒たちが生き活きと授業に参加し発言しているのが印象に残りました。いつもはもっと活発だということなので、普段からていねいにご指導されている成果なのだと驚きました。

今日は本当に素晴らしい授業を見せていただきました。

ありがとうございました。

宮城広瀬高校

途中までしか見学できませんでしたが、生徒が先生の問いかけに対して一生懸命応えて考えている姿が印象的でした。国語の時間で、内容について書かれていない部分まで十分に想像させ、生徒の考えを自由に発表させることで理解が深まっていくことが分かりました。

Be 動詞の役割や文法で説明すると難しい a と the の区別など、英訳していく家庭で理解できるようになっていくように思われました。

ありがとうございました。

古川高校

英語の授業から参観しました。講義形式ではなく、生徒に問いかけながら授業を進めていく授業なので、生徒はイメージをふくらませながら楽しく授業を受けている様子でした。発言に関しては、いろいろな生徒さんの発言をきいてみたかったです。

日本語の不明確な文法と行間を読み取る物語をていねいに英文にしていけるのはたいへんでしょうが、生徒にとっては活きた授業になると思います。

◎食堂でごはんを食べました。どこでも生徒さんがあいさつをしてくれてとても気持ちよいです。ほめてあげてください。

◎かおる先生へ、お互いがんばりましょうね。

泉館山高校

私は、国語教師でも、また英語教師でもないのに、その点からこの授業を論評する用意もありませんし、また参観されていた方々のように教える教師の立場から何かを言うというようなこともできません。生徒たちとともにあの授業（出来事）を共有したのものとして感想を述べたいと思います。

一つは、生徒たちが大変リラックスして授業に参加していることが印象的でした。あの授業の中に流れている時間はとても穏やかでのびやかです。先生の問いも、生徒たちの応答もとても自然です。力みがありません。

生徒たちは一見思ったこと感じたことをポンポンと口に出しているように見えますが、それは形のないうものに輪郭を与え、この世界（作品世界）を自分たち自身の言葉で捕まえ描き出そうとしているように思いました。言葉さえ見つけることができれば・・・この世界は違う景色と豊さを私たちにを見せてくれる。そういう生徒たちの姿のように思いました。

主語―述語を問う授業は、ややもすれば単調で退屈なものにもなりかねないのではと思っていましたが、生徒たちはその主語―述語にこだわることをとおして助詞や言葉の持つ微妙な表現やニュアンスの違いに着目し、そこから現れてくる作品世界を楽しんでいるように思います。英語と日本語と一緒に学ぶことで、より言葉に対する感受性が敏感になっているようにも思いました。それは、物語を「読む」という行為の醍醐味を生徒たち自身が感じつつあるからだだと思います。

またかおる先生と忠夫先生の2人の授業中のやり取りや相談が、生徒たちの中にある既成の教師像に揺さぶりをかけているとも思いました。新しい教師と生徒の関係が生まれていると感じます。

宮城教育文化センター

国語の授業の時に感じたのは、泥棒とねことの間をどう掘り下げるか、という問題でした。「どろぼうのねこ」という言い方は、一見一般的なようで、深い意味があるのではないのでしょうか。「泥棒が飼っている猫」ではなく、「泥棒の猫」というのは、泥棒が猫を相棒として扱っていることを意味しているのではないかと、思うのです。だから、「大声で泣きながら」歩いたのでしょう。そのとき、ダイヤモンド（当然一個の大きなダイヤではなく、袋に入れたたくさんの小粒のダイヤをイメージすべきでしょう。）といっしょに猫を抱いたのは相棒が命をかけて手伝ってくれたことへの感情表現と考えるとよいと思います。付け加えると、泥棒がその後、別の猫と組んでも、このトラ猫ほど泥棒が仕事を終えるまで十分な時間を踏み留まって、犬に吠え続けさせることのできる猫には出会わなかったのではないのでしょうか。やはり特別な猫なのです。

英語の授業で around や at を思いつかせるためのヒントの出し方が苦しいのは前置詞の指導の難しさですが、at、in、on、around についての①場所の例と②時間の例とを挙げてイメージをつかませておくといよいのではないかと思います。「夜の町を歩きました」は walked in も考えられるが、「家路」と考えると through にしたらどうでしょうか。そうすると、He walked crying loudly through

the night town to his home. として、締めは、He buried the dead cat in his small garden. とできるのではないかと思います。

実はこの日本語の「～なっていました」の表現する内容にこっているのですが、農耕民族である日本人の言語では「春が来た。」「花が咲いた。」というのは、「現在完了」になると思われるのです。つまり、農業にとって季節は過ぎるものであり、植物は成長するものであって、時間の区切りはあまり必要ないものと思われます。ところが、狩猟牧畜民族にとっては、獲物や襲撃者が「いるのを見た」だけなのか、「来てまだそこにいる」のかを瞬時に区別して伝える必要があるので、時制を細かく区切るのだと思われます。

日本語で純粋に過去を表す「～た」は「あるとき ねこは どろぼうのねこでした」のように時を表す副詞といっしょに使われたときでしょう。そういう意味では「100万回死んで、100万回生きたねこがいました。」も「昔あるところに」という時間的限定が予測されるので過去なのだと思います。

新英語教育研究会

資料 7 研修授業参加者感想（12月9日）

・1冊の絵本を題材にして生徒たちから様々な考えが出ていたので驚きました。私自身一度読んだときはあまり感銘することもなかったのですが、生徒たちのいろいろな解釈の仕方を聞いていると あーそのような読み方もできるんだなと読みを深めることができました。そして、この作品が名作と言われる所以も幾分分かったような気がしました。

そして、その国語の授業の余熱をもって英作文の授業が行われているので、生徒たちも文章の意味を自分なりに解釈してから英語に直そうとしている姿が見られました。やはり、もとの日本語のテキストを自分なりに解釈し、頭の中でイメージすることができてから英訳する方が、生徒にとっても理解しやすいだろうと思います。

頭の中で十分なイメージができれば生徒からいろいろな英語表現が飛び出すかもしれません。そうしたらそれらの表現を黒板に書いていって皆でどちらの表現の方がよいか吟味したりするやり方もおもしろいなと思いました。

放課後の座談会でも生徒たちから「だんだん分かるようになって嬉しかった」「楽しかった」などの感想が出ていました。

小森先生の授業では、最後の詰め所で内裏・朱雀大路・羅生門という洛中のイメージとそれに対峙する下人のイメージがぶわあ〜と浮かび上がってくる感じで迫力がありました。続も楽しみになる授業でした。
(県立石巻支援学校・英語)

・「英訳する」というゴールがあるからこそ、じっくりと深く細かく日本文（作品）を読み込む必然性が生まれるのだと思いました。

作品に魅力があります。子どもの頃に読んだのと高校生・大人になって読むのと、それぞれの味わいがあります。

私も「100万回生きたねこ」は好きで、自分の子どもにも読み聞かせ、また、中学生に道徳で扱い

ました。

授業の冒頭の高橋先生のしっとりした読み聞かせや、生徒と先生お二人との発言のやりとりがとてもよい雰囲気でした。
(利府町立利府西中学校・英語)

・前回の授業を参観した先生からの勧めで今回伺いました。

国語は、この授業内容をテストでどう評価するのかとても興味深く感じました。高橋先生が「1. はじめに」で書いていらっしゃる、「生徒が、文章の内容を分かっていないのでは～」は、私も授業をしていてよく感じています。そこを突き詰めて考えずに、とりあえず、授業中、生徒の手をとめないことに終始した授業になっていると反省してばかりなので、今回の授業から、それを打開するヒントがいただけたらと思います。

全体の印象として生徒が生き生きと楽しそうに授業に参加していると感じました。先生と生徒、生徒どうして授業を作り上げていると感じました。一方で、発言をあまりしない生徒をどう引き込んでいくのかをお聞きできればと思いました。

英語は、基本的な単語力のない生徒にとってはかなり難易度が高いのではないかと思います。板書を映すだけでせいっぱいの生徒はいるのでしょうか。

文章を読んで、それがイメージ化できればその文章がわかったということだと聞いたことがあります。が、国語の授業は、それをしているように思いました。
(加美農業高校・国語)

・生徒たちが、それぞれの思いや考えを自由に話している姿が前回と変わらずに印象的です。

先生の語りかけが優しく温かく忍耐強く、生徒たちも発言しやすい雰囲気だと思います。見ている方も優しい気持ちになり、居心地の良い空間に引き込まれて言ってしまう。

教えることはこんなにも面白いのかと思わせてくれます。

ありがとうございました。

(宮城広瀬高校・英語)

・国語の授業においては生徒の行間を読み取る鋭い意見に感動しました。英語の授業の中で新たに読者にそのニュアンスを伝える翻訳をするには、国語の時間における言葉の意味や、言葉が持つ重みに敏感になることが必要であることに気がつきました。生徒たちはその作業を通して英語が持つ単語の語感を学んだり、そのことにも敏感になることができると思いました。

また、自分たちが習ってきた語彙の中で、十分にそのニュアンスを伝えることができると学ぶこともできると思いました。

題材選びのすばらしさ、先生方が言うように、この作業を通してこの題材の魅力が失われていないと思えました。

生徒一教員間のレポートがとれている素晴らしい授業でした。ありがとうございました。

(黒川高校・英語)

・生徒の国語の力を伸ばすにはどうしたらいいか、日々悩みながら授業をしています。コラムの書き写しや短作文練習など色々やってみましたが、いずれも成果がすぐ出るものではないため、継続して取り組むことができなかったり、「わからない」生徒は「わからない」まま終わってしまうことがよくありました。

今回の協同授業で、主語と述語に注意させて一文をじっくり読ませることの大切さを痛感しました。

一語一語の役割、意味を考えさせることで、読みを深めさせ、日本語を読む力を深めていけるよう、今後の指導の中で、ぜひ今回学んだことを取り入れていきたいと思いました。また、英語との協同授業にも挑戦していきたいと思いました。

二項対立で「羅生門」の冒頭部を読む、という小森先生の特別授業は、私も生徒の一人となり一時間楽しむことができました。一文一文の中に対立があるという新たな読みは非常に興味深く、大変勉強になりました。最後の問いかけが見事でした。(黒川高校・国語)

・今日は大変興味深く楽しい授業をありがとうございました。

高橋先生の授業では、発問によって生徒の皆さんが文脈や言葉に立ち止まり、内容の読み取りを深め、死生観や愛情について各々の思いを言葉にしたり思索を深めている姿に感銘を受けました。

佐々木先生の授業では、英訳する前に先生が本文の日本語の主語・述語や状況を確認し、明解化する活動を行って下さることによって、日本語本文の読み取りが深化し、場面がよりリアルに浮かび上がってくることを感じました。また、英語の表現や単語を選ぶ際には、例えば、silent と quiet のようにどんな場面で使う単語か、どんな温度を持った言葉かを解説しながら、生徒諸君に問いかけて下さるのが、英語学習として大変わかりやすく素晴らしかったです。英会話や英作文の授業としても、今この瞬間の興味関心に合致しているので生徒さんの意欲も集中力もそがれない気がしました。

この合同授業、国語力アップの面でも、英語力アップの面でも大変優れていると思いました。そして、死生観や愛、自分らしく生きる、など、高校生と語りたい深いテーマのテキストを選ばれたことにも感銘を受けました。高橋先生と佐々木先生のすてきなコンビネーションと生徒たちともあたたかい関係作り、勉強になりました。(みやぎ教育文化センター関係)

資料 8 小森陽一氏と生徒の座談会(12月9日)

かおる 誰から始めますか。まなえさんから行きますか。

小森 率直なところ聞かせて下さい。

鹿野愛恵 日本語と英語が得意な方ではなかった あまり楽しくはなかった。

丁寧に主語や動詞品詞などを教えてもらい国語の楽しさを知り、英語へと発展していくので
楽しみを覚えて 同じ言葉を繰り返してやっっていく打ちに
繰り返し 理解してきて 覚えて 書けるようになり 楽しさをしてもっと学びたいという意欲が湧いた。

瑞貴 国語と英語とつながっているというのが最初よく分からなかったので、

国語でやった後どうして英語でもう一度やるのかと思っていた。

国語…書いてある言葉からいろんなことを深く自分で想像していったイメージをふくらませていた後でそこから英語に直していくので、自分が今まで英語だけでやっていた英訳より、イメージしながら英語に訳していけるので自分の中ではわかりやすいと思った。

- 小森 イメージとはどういうこと？ 頭の中に映像が湧くということ？
- 瑞貴 猫のことを想像したり、猫が亡くなったシーンを言葉で書いてあるのを頭で想像しながらやった。
- 小森 想像するのが英語に結びつきやすくなったということか？
- 瑞貴 こういう状況なんだなとわかっていると、動かなくなる…動きが止まる、ストップを使うと言うことが想像したから理解できた。
- 朋華 日本語では隠されている主語を英語では書かなければ行けない。英語だと語順がよく分からなくなることが多かったが、語順がわかりやすくなった。
- 小森 語順？
- 朋華 私は何々です。 英語だと 私はです何々。
- 都築 国語で主語と述語をしっかりすることで、英語で訳すとき主語と述語がわかりやすくなるので
- 小森 主語と述語をはっきりさせるとどうして英語が分かりやすくなるの？
英語で単語がわからなくても、国語で想像したりしてやることでいろいろな単語がでてくるので。色々思い浮かぶようになるということ？
- 瑠璃 国語と英語を一緒にすることで、国語を深く読んだことで細かくイメージしたことを想像して英語に訳すことができたので、イメージしたことを活かしながら英訳できた。
- 小森 どうすることが深いのか？例えば普段はそうしないのに、こうすることが深いんだとか教えてくれる？
- 瑠璃 主語と述語を確認したり、言葉一つ一つの場面場면을思い浮かべることで、一文一文をちゃんと確認しながら自分の頭の中でその場면을想像していくことができるので。
- 小森 一文一文の場면을想像するの？
- 香奈子 私は国語も英語もどっちも苦手で、やっていけるか不安だったが、品詞など細かく教えてくれたことで英語にも直しやすかったし、日本語で読んでいるときも想像がしやすかったし、最後の方はすごく楽しい授業だと思った。
- 小森 どの辺が楽しかった？
- 香奈子 最初は聞いてても自分が苦手だったので、何言ってるんだろう→何回もくりかえしていることで 何となく自分一人でも分かるようになって、分かるようになったことがうれしくて。

小森 分かるようになるきっかけは？苦手だなやだなあからあちょっと楽しいかもとなった転換点は？

かおる 9月2日にやった公開授業の時はどうだった？

香奈子 わかるところはわかるんだけど、わからないところはわからなかった。

かおる のらねこになったあたりは？

香奈子 ねこがひとりになってからの授業が楽しかった。

ゆかり 物語を深く読み詰めることができ、英語に直すときも主語や述語が分かることによって簡単に英訳することができ、とてもわかりやすく授業することができた。

小森 分かりやすくなる原因みたいのはどこにあったの？あなたにとっても発見とか？

ゆかり 国語で深く読み進めていく中で、自分の中で話の中の情景が浮かんできて、情景が浮かんでから英語に直すとわかりやすい。

小森 深く読むと情景が浮かんでくるのね？その場合の深さってどの辺り？
具体的に言うと、自分だけだったらこうだったのに、かおる先生にこう言われたので深くなったと言うことで覚えていることがあれば教えてもらいたい。
ちょっと難しいか。分かった。

夢里奈 日本語を先に読み進めていくことで、一文一文の場面をイメージすることができ、単語毎に強調とかそういうのが隠されているということを読むことで英語に訳するときもそのイメージを保ったまま場面に合った単語をみつけることができやすいなと思った。

小森 場面にあった単語を見つけるという例えば具体的なものは？

夢里奈 自分たちで訳をしたときに、辞書を引くと様々な単語が出てくるんですけど、その中でどの単語を選ぶかっていうときに、日本語で読んだイメージが単語にあっているかって探し辞書の様々な単語の中から選ぶことができる。

小森 辞書を引くときも取舍選択ができるということね。

靖子 日本語から英語に直すことが苦手だったが、日本語を最初にやって英語に直すことで、直し方は最初は全然分からなかったんですけど、やっていく内に、主語と述語を見つけて、そこから単語をどんどん探して行って、できて、物語の中でやっていくので、物語に入ってから、～できて、楽しくなってきた。

小森 何が分かった辺りから楽しくなったのか？普通授業ってあまり楽しくないよね。

- 靖子 「きれい」だったり「だいきれい」と言う言葉を英語にするときにちょっとだけ変わってくるので、そう言うところを見つけられると、あこつうふうになるんだなと思って。
- 小森 同じような言葉でも微妙に雰囲気とかニュアンスとか違って、そののどっちがいいのかって言うのが選べたときにやったっていう楽しさが出てきたということね。
- 瑠美 特に日本語から英語に訳すのが苦手だったが、この授業は基礎というか細かいことから丁寧にやってきた授業だったので、だんだん分かるようになってきたし、意欲的に取り組むようになってきた。
- 小森 どの辺りが丁寧なのか？
- るみ 動詞とか名詞とかをちゃんとはっきりさせて、これは英語にするるとこの位置に来るとか日本語と英語のの違いがはっきりとわかる、想像をふくらませてくれるような先生の問いかけだったりとかが丁寧なところだと思います。
- 小森 先生が問いかけてくれる応答の中で、色々新しいものが見えてくるということですね。
- 麻実 絵本の文章の英訳なので、普通の国語や英語の授業では分からなかった部分もすんなり頭にはいってくるのができたので楽しく授業することができた。
日本語では一つの意味でも英語にはたくさんの意味があったりするので、そのようなところも発見できて楽しかった。
- 小森 日本語では一つの意味だけど英語では複数の意味って言うのは、例えば？
- 麻実 「感じられる」で、ファインドやフィール、度合いによって使う単語が違うということも発見することができた。
- 小森 忠夫先生はアレがよかったととても言っていたよ。先生もファインドのつもりでいたけれどもみんなからフィールがでて喜んでいて。
先生の喜ぶところとみんながわかったところって一致しているんだね。
- 華子 運命共同体なんだ～
- 萌花 私は「100万回生きたねこ」という絵本を初めて読んで、英訳にするのが日本でまだやられてないと言う話を忠夫先生が言っていたので、私たちが初めて英訳するんだと授業がとても楽しみだった。元々英語と国語は好きなので一緒にやることに対しては特に苦にはおもはなかったが、難しい単語とか文法に対しては苦戦したりしていたんですが、一番は、先生と生徒と一緒に考えて授業するということがとても楽しいなと思った。普通の授業だったら、先生が話をして生徒がそれを聞くって言う立場にいたんですが、英語の同じ表現の単語でもたくさんあって、ここはこうした方が表現的にはいいよねっていう話を先生と生徒がお互いに行うことによ

ってしゃべらない人がでないって言うか、生徒と先生が全員が話せるという雰囲気になるのが楽しいなと思った。

小森 そう言う授業はあまりないのかな。

萌花 私が感じている中ではあまりない。他の授業とは違うところがあっていいなと思った。

紀果 本で、普段だったらただ読んでいるだけなのに、かおる先生がやったらその単語が大事みたいに言ってくるのが、最初は作者がたまたま書いただけなんじゃないかって言っていたのが、授業やっていく内にその言葉が意外とと英訳しているときに大事だって言うのが分かってきた。

小森 もし実例があれば

紀果 ねこは、王さまなんか嫌いでしたの、王さまなんかのなんかが、ののしりの気持ちを表す言葉みたいな感じで、英訳するときは、ディスライクじゃなくてそれよりもっときらいみたいな意味のヘイトを使う。

小森 もうちょっと教えて。

紀果 ねこは王さまが嫌いじゃなくて、王さまなんか嫌いでしたと、ディスライクじゃなくてヘイトみたいな。

小森 つまり、きらいをディスライクとヘイト二つ言葉があったとすると、なんかで強まっているからそこはヘイトにした、ということね。みんなで考えてそうなのね。なんかのニュアンスを出すためには、英語にはなんかがないから、ディスライクかヘイトのどっちを選ぶかでヘイトになんかを込めた、そういうことね。そういう討論をしながら決めていくんだ訳語を。

智也 英訳するとき、そのシーン毎の描写をできるだけ再現するために色々ことば主語を足したり文そのものを買えたりしたのが面白いと思った。さっきの授業も「ねこは、きづいて・・・」という所があったと思うんですが。

「ねこは白いねこが自分の隣で静かになっているのに気づきました。」気づくってやっぱりノウティスだと思い、僕も最初はこの気づくはノウティスだと思っていたのですが、この意味では、猫は白い猫が亡くなっているのを感じたから、ノウティスよりフィールの方がそのシーンをうまく再現できると思うのでひどく感心しました。

小森 みんなで色々出し合って作りあげてあそこで訳文ができあがってる時に納得感があるわけ？自分たちで納得できる訳になっていくのが喜びにもなるんだな。そうか。

華子 今まで3年間ずっと忠夫先生の英語の授業を受けてきたのですが、忠夫先生がよく言っていたのは「日本語が分からないかぎり英語は分からない」と言っていた。それはそうだろうと分か

った気になっていたのが、この授業を受けてそのことが全く分かってなかったということに気づいた。日本語って言うのは、私が思ったこととは人によってとらえかたとが違うので、様々な角度で捉えていくことができ、そのなかで忠夫先生が的確に、イメージを広げていかないと英訳にはできないということにこの授業を通して気づいた。

小森 みんなイメージって言うことを言っているが、実際にどのように授業していたのか・

華子 実際に自分が猫の視点になってみたり、セリフをお互いどうしに言ってやってみたり。

～再現しました～

「たったいっぴきねこに見むきもしない白いうつくしいねこがいました。～

小森 みんなでそうやってここはどう読むのがいいのかってやってみたのね。意見を言いながら。どういう声で読むのが言いかって。そう言うプロセスだったというのが分かった。そうやってイメージを広げていくことができたんだな。

富栄 初めて国語と英語二つあわせた授業をうけて、国語の方ではかおる先生が形象読みして一文一文時間をかけて読むことをして、それを聞いて実際に場面がどういうものなのか想像して授業することができました、英語のほうは、最初難しいのかなと思っていたのですが今まで習ってきた単語を使えばできるということ、楽しくすることができた。

小森 今まで使ってきた単語と言うことは、かなり忠夫先生は意識してやられたわけ。あたらしいってことじゃなくて？

華子 簡単なやつ使おうとしていたよね。

小森 みんなで出していくとだれかがあたるみたいなの？

華子他 それ楽しいよね。わたしたちでもできるみたいなの。

小森 とにかく教室にいるみんなの頭の中にある英単語でできあがっていくって言う感じ。それすごい大事なんだね。

華子 ありがとうございます。

勇太 私は、英語の授業をするときになかなか本文の内容を理解することができなかったのですが、最初に主語と述語を理解して、そのあとに主語と述語を意識しながらやることで内容をしっかり浮かべることができたのでそこがよかった。

小森 主語と述語を意識するって言うのは、どういうときに

勇太 先生の話をしっかり聞く。

重信 教材がいいなって思いました。「100万回生きたねこ」は幼い頃に読んだことがあったので、プラス、かおる先生の授業で思い出した後に英語の授業に入ったので、積極的に授業に入れた。

小森 思い出したことがあったら言って下さい。

かおる 「おらってる」という新しい単語を知ることができて、すごいなって思いました。

「おれ100万回も生きたんだぜ」～

愛恵 私だけ何も突っ込まれなかったのが精神的に来ていて。

小森 そうだったと思って、今つっこんでるんですよ。

小森 国語の楽しみ方を覚えたって言うところが聞きたかった。楽しみかたってあるとすれば何？

愛恵 漢字が大の苦手なんですよ。小4の時家って言う漢字が書けなくて、そこでくじけまして……。

小森 私は小学校6年生のときに日本に帰ってきて、漢字を書いていなかったの、小学校で書く漢字が書けなかった。コツを教えてあげよう。……。

愛恵 漢字が総合学科最下位で、国語が苦手意識を持ち始めて、読めるんですけど書けなくて、意味も分からなくなってしまって、忠夫先生が国語がわからないと英語がわからないと言われ、国語がわからないので英語もわからないという悪循環ですーっとできなかつたんですが、かおる先生が小学校や中学校で習うようなことを改めていちから丁寧にいっこずつ教えて下さって、私たちのペースにあわせてくれるんで、私たちが何かいっこ質問すればそれに対して真剣に答えてくれさるんでわからないことをそのままにしないで授業の内にわからないことを消化して理解してって、何か一つ授業で一個覚えようって自分で目標見つけてそれを理解して、英語ではそれをちゃんと直せるように頑張ろうって目標を見つけて、やっていくことで、楽しさを見つけて、授業に参加できるようになりました。

小森 3年生で、よかったですね。

華子 先生方の雰囲気よかった。先生方が楽しそうにやるから私たちも楽しかった。見ててうれしくなる。

小森 親心だね。生徒なのに。

愛恵 授業なんですけど、授業みたいな堅苦しい雰囲気ではなくて。

華子 そうそうファミリーだよ。

小森 ファミリーなんだ。

華子 孫の気持ちになる。

小森 先生が楽しそうだと生徒も入れるってことなのね。

愛恵 かおる先生が分からないことがあると、そのままにしないで忠夫先生にいいんですよねって聞くんですよ。

小森 お互いに確かめ合ったりしているときに。

華子 先生だって分からないことがあるんだなって。

小森 その発見が大事だって分けね。
今日こだわった「なっていました」あすこは先生方の反省会で二人とも引っかかっていたのでお互いにどうなってことになって、あすこをちゃんとやろうってということになったって言うことですが。それはみていてどうだったの？

華子 なんか認めてくれたのね～みたいな。

小森 でもさ、話としてはかなり難しい話でもあったわけでしょ。あなた方、とら猫って言うけど、誰から見てこうなのっていう、日本語の表現そのものをかなり突っ込んで分析してみたいな話ですよ。それは聞いて面白かったという感じ？あの場面の感想を聞きたい。すごい難しい話だと思うよ。あすこは。

紀果 なれですよ。なんかたぶんこあるなみたいな。

華子 最初はほんとにそうやっていろいろつままれてもういいじゃんと思ってたんですよ。

小森 最初はうざい感じ？

華子 もういいじゃんみたいな。それがなれで、ああそうよねそう考えるよねっていうか。

小森 この二人の先生がこだわるところがだんだん慣れて分かってきた。

華子 次くるよねみたいな。

小森 予測ができるから

華子 構えてられる。

小森 そちら辺は先生としてはどうですか？

かおる たぶん、今日は私が言わなくても「なっていました」は気づくはずだと思っていました。「なりました」と「なっていました」が違うっていうのも絶対気づくはずだと思って、ここまでできたら気づくよこのひとたちっていうところで、

小森 じゃ、先生としても生徒の皆さんへの信頼感みたいなものはあるわけだ、形成されてたわけだ。

かおる はい、毎時間毎時間読み取りがきちっと

小森 この人達はできているって

かおる できているって、ここは大丈夫だろうと思っていました。

華子他 ありがとう。

かおる 忠夫先生と、ここはいくよねみたいな感じで。

愛恵 最初にかおる先生が佐野洋子さんの本の書き方についてを最初ちょっと詳しくやったんですね。こういう書き方をとか、こういう思いで書く方なんだよっていう話をされてから、最初の授業の頃は、作者はたぶんこういう風に考えてこうやったと私は思うのみたいな感じで私たちに問いかけてくれたんですね。たぶん、それによってかことのりかの言ってるなれは、先生がこうくるだろうなっていうなれではなくて、作者はこうくるだろうっていう、こうくるであろうという読みのなれだとおもうんですね。先生達がついてくるなれではなくて。

華子 ありがとう、ありがとう。

小森 むしろこの「100万回生きたねこ」という佐野洋子さんの日本語がどういうふうになっているのかっていうことが理解できて、次はこうくるぞみたいな予測がつくようになったっていうことなんだ。

小森 それってすごいじゃないですか。

華子 成果ですから。

小森 本当に文学が読めてるってことだよな。

華子 私たち集大成ですから。

小森 やっぱり集大成感はあるの？

華子他 あります。あります。

小森 集大成感がある授業ってすごいですね。

かおる　すごいですね。

紀果　いや　かおる先生褒められてるんですよ。

小森　そうだよな。

かおる　あの先生達の話し合いの時に小森先生がおっしゃったのは、こういうことができるのは生徒がいるからだよねって。お話しされたんですけど、私ほんとにそう思って。みんながいるから私こういうことができるんだ。

愛恵他　感動してるんだ。

かおる　感動してる。て私は毎時間思いながらほんとうにうれしいなあっていうか。

紀果　どこ大学出身ですか。

小森　でた大学は北海道大学。

紀果　そでどこから東京大学教授になったんですか。

小森　そうだね。

紀果　やっぱり東大はあたまいいですか。

小森　微妙だね。

華子　東大生と私たちとどっち頭いいですか。

小森　頭がいいかどうかと言うのは何をもちょうかでしょう。試験はできるよ。点数はとれる。この頃は、そこまで言うのって言う子もいるんだけど、例えば、卒業論文何にするって言う話になるでしょ。3年生半ばになると。先生、おれ点数はとれるんだけど自分でもの考えられないんですよみたいな、そう言うことを平気で言う子が現れている、それをあたまがいいかというかね。点数を取るテクニックはとことん鍛えられているって本人も自覚しているんだけど、自分が何が面白いのかって言う議論ができるかって言うとなかなかそうじゃない場合もあるのね。小学校からずっと競争してきて、点数が高いかどうかで勝ち抜いてきてるわけでしょ、それで大学入ると、それまでふるさとでは神童で偉かったかもしれないけど普通の人になるわけじゃない、だから深刻ですよ、入学時に3割は精神的に病んでる、ほっとくとそうなりますよまで入れると6割なのね、だからそこまでして競争するかなっていう感じさえて、それをどうやってセラーピーしていくのかって言うことに力を使わなければいけなかつたりね、そう言う意味でいうと、皆さんの今日の授業とかは本当に頭いいと思いましたよ。あのかけあい、かおる先生や忠夫先生とかかけあいができる、それはね……。

私が東大に移ったときまでは、東大に行くのは東大の人だけだったの。……。

紀果　なんで東大の先生が小牛田農林で授業やってるんですか。忠夫先生が宣伝してきたんですか。

小森　いや、えっと、かおる先生との。

かおる　一番最初は、あの……。

華子　どういつながりなんですか。詳しく教えていただきたい。

かおる　文芸部の生徒を連れて、アーサービナードと小森さんのお二人で行う授業を見に行っただけです。

小森　そうですか。仙台？

かおる　ところが、アーサービナードさんしか来てくれなくて、

清岡　小森さんが用事があって急遽来れなくなって、アーサービナード一人で授業してもらったんです。

生徒　だれ？

かおる　日本人じゃないんだけど日本語で詩を書いたり、そこがスタートでそこからどうなったんでしたっけ？

小森　それで、お詫びで私が……。

清岡　それで、お詫びの行脚でというわけではなくて、そのときに、その前に小森さんに「カラスの北斗七星」で1回高校生の公開授業をすでにやっていただいていたんで

かおる　仙台一高ですよ。

清岡　それで、一高でもやってもらってるんですって言う話をかおる先生にしたの。かおる先生がそしたら、小牛田農林にもきてくれますかねって言うふうに言ったので、

～忠夫先生登場～

清岡　それで、言われたのできっと時間があったら来てくれると思いますよって、言うんでつながって、って言う感じです。

かおる　清岡さんが小森さんに連絡を取ってください。て

華子・紀果　あなたなしではこれはなりたない。ありがとうございます。

清岡　神ですからね。

華子・赤間 やべ～。

小森 せっかくだから今日授業終わってどんな思いなのか聞きたいよね。

忠夫 たぶんあなたがたよりも俺が楽しんだ授業だと思います。

華子 確かにね。顔うきうきしてたもんね。

忠夫 授業に入る前に色々考えてやってきて、かおる先生ともいろいろ話をして、あなた方と話をする、あらまた変わったって。今日もねいろいろ変わったので、そういう点ではすごくこう、一番最初この授業を始めるときに一生懸命英語に直したんだけど、あれとは全然違うのが今できあがっているということ。

小森 それこそ、みんなで作った英語バージョンなんですね。

忠夫 はい。

小森 それ、佐野洋子さんに交渉してさ、そのね、

生徒 わ、わ、会いたい！！

小森 「100万回生きたねこ」の著作権保持者って言うか継承者に

かおる 息子さんですかね。

小森 うん。

生徒 え え 佐野洋子さんて今生きてないの？

生徒 亡くなったの？会えると思ったのに。

かおる 会いたかったね。すっごいひとだったっていうから。

小森 つまり、英語バージョンの出版ができればいいのになって。
でも、せっかくだから、完成判はまとめ

忠夫 そうですね

小森 ねえ

忠夫 年明けの授業で今までやったやつをもう一回全部まとめて英語にしたやつと日本語と較べてみるっていう授業をします。

かおる　それが最後。

小森　そうか。でもね、ほんとにこの授業が楽しかったって言う印象は、とても伝わりました。